

RA 協議会第 8 回年次大会 F-3 セッション/  
第 15 回 JINSHA 情報共有会 報告書

最近よく聞く「総合知」って何？  
—人文・社会科学の視点から—

# 目次

**p.1 趣旨説明**

東京大学リサーチ・アドミニストレーター推進室 新澤 裕子

**p.3 人文・社会科学系 URA 境界での『総合知』をめぐる状況**

大阪大学経営企画オフィス URA 部門 川人よし恵

**p.18 人文・社会科学系研究リソースの可視化と総合知**

京都大学学術研究支援室 (KURA) 稲石奈津子

**p.34 リエゾンとしての「総合知」**

**人文学をハブとした応用連携の可能性**

東京大学大学院人文社会系研究科/  
東京大学連携研究機構ヒューマニティーズセンター 齋藤 希史

**p.45 総合討論**

本セッションは、人文・社会科学系 URA ネットワーク JINSHA の第 15 回情報共有会としても位置付けられています。このネットワークは、2014 年以来続く人社系 URA 業務担当者のゆるやかなつながりであり、現在 13 の大学が参加しています。

### 人文・社会科学系 URA ネットワーク (JINSHA) とは…

2014 年以來、「人文・社会科学系研究推進フォーラム」を連携開催している幹事校\* URA を中心とした、人社系 URA 業務担当者のゆるやかなつながり。イベント開催や情報共有等の活動基盤として機能。

\* 大阪大学、京都大学、筑波大学、早稲田大学、琉球大学、北海道大学、横浜国立大学、中央大学、広島大学、東京大学、東北大学、新潟大学、神戸大学 の 13 機関

2023 年 3 月に広島大学主催で  
人文・社会科学系研究推進フォーラムを  
開催予定

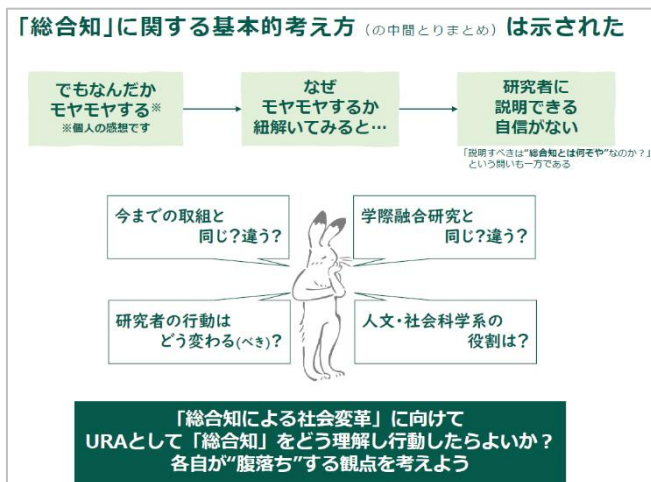
さて、本セッションの背景として、皆さんよくご存じの第 6 期科学技術・イノベーション基本計画があります。科学技術基本法の 25 年ぶりの本格改正によって、科学技術・イノベーション政策が、科学技術の振興のみならず、社会的価値を生み出す人文・社会科学の「知」と自然科学の「知」の融合による「総合知」により、人間や社会の総合的理解と課題解決に資する政策となったことを意味すると、基本計画に記載されています。

その政策の方向性としてウェルビーイング、そしてその実現に向けた「総合知」による社会変革が示され、「総合知」に関する具体的な取り組みとして、その基本的な考え方や戦略的に推進する方策について、2021 年度中に取りまとめると書き込まれました。これに基づいて、CSTI での議論を経て、今年 3 月に中間取りまとめが出されました。「総合知」とは「多様な『知』が集い、新たな価値を創出する『知の活力』を生むこと」が基本的な考え方として示されています。

基本的な考え方は示された、でも何だかモヤモヤするというのが、このセッションの始まりです。皆さんはいかがでしょうか。別にモヤモヤして

ないよ、という方もいらっしゃるのではないかと思います。私の場合は、あたかも新しい概念かのように、この「総合知」というキーワードと定義が与えられて、何だかモヤモヤしました。それをひもといてみると、「『総合知』ってこういうも

のですよ」と研究者に説明できる自信がないのです。それではいかんということで、「総合知」による社会変革に向けて、URAとして「総合知」をどう理解し、行動した



らよいか、各自が腹落ちする観点を考えようというのが、本セッションの趣旨となります。

そこで、これから3つの講演をお願いしています。まずは「総合知」に関するモヤモヤを共有するところから、「人文・社会科学系 URA 界限での『総合知』をめぐる状況」というタイトルで、大阪大学経営企画オフィス URA 部門・川人よし恵さんからお話いただきます。次に、研究リソースの可視化から「総合知」を考えるべく、「人文・社会科学系研究リソースの可視化と『総合知』」というタイトルで、京都大学学術研究支援室・稲石奈津子さんからお話いただきます。最後に、文理融合だけではない「総合知」を考えるべく、「リエゾンとしての『総合知』－人文学をハブとした応用連携の可能性」というタイトルで、東京大学人文社会系研究科・齋藤希史先生からお話いただきます。

## 人文・社会科学系 URA 界限での『総合知』をめぐる状況

大阪大学経営企画オフィス URA 部門 川人 よし恵

大阪大学経営企画オフィス URA の川人よし恵と申します。私からは「人文・社会科学系 URA 界限での『総合知』をめぐる状況」と題してお話しさせていただきます。今年5月24日に開催しました「総合知」の勉強会に関する内容をベースに、関連する話題を提供できればと考えています。

RA協議会 第8回年次大会セッション

「最近よく聞く『総合知』って何？—人文・社会科学の視点から—」

### 人文・社会科学系 URA 界限での 「総合知」をめぐる状況

2022年8月31日(火)

川人よし恵(大阪大学経営企画オフィス)  
kawahito.yoshie.omp@osaka-u.ac.jp

### 本日お話しする内容

- 人文・社会科学系 URA ネットワーク 幹事校 (JINSHA) による「総合知」勉強会 (2022年5月24日開催)
- 勉強会参加者と「総合知」
- 参考: 「総合知」に関連する国内外の動向例
- このセッションに期待すること

## JINSHA による「総合知」勉強会

5月の勉強会は、「総合知をつくる知のマネジメント—URAに求められる活動を考えよう！」と題し、早稲田大学研究戦略センターの丸山浩平さんと、大阪大学・川人で企画・運営をさせていただきました。先ほど新澤さんからご紹介があった、人文・社会科学系 URA ネットワーク幹事校 (JINSHA) のメンバーの協力も得て、このネットワーク関連イベントの1つとして位置づけられるものです。

5月24日 勉強会スライド

人文・社会科学系URAネットワーク幹事校 (JINSHA)  
「総合知による社会変革」に向けた人文・社会科学振興と  
研究支援に関する勉強会

### 総合知をつくる知のマネジメント —URAに求められる活動を考えよう！—

- 日時: 2022年5月24日(火) 16:00-17:30(最長18:00まで)
- 場所: オンライン

問合せ先: 丸山浩平(早稲田大学研究戦略センター) [kmaruya@aoni.waseda.jp](mailto:kmaruya@aoni.waseda.jp)  
川人よし恵(大阪大学経営企画オフィス) [kawahito.yoshie.omp@osaka-u.ac.jp](mailto:kawahito.yoshie.omp@osaka-u.ac.jp)

この勉強会の背景について、簡単にご説明します。RA協議会のスキルプログラム専門委員会が、テーマ別勉強会への助成を昨年度試行され、そこからご支援をいただいてシリーズとして勉強会を開催しました。初回は昨年12月22日開催分で、内閣府にて総合知戦略の取りまとめを担当されていた佐野泰三様に個人の見解をお話いただく場を設け、ディスカッションを通じて「総合知」について理解を深めることを目的とした勉強会を実施しました。

その続きとしての5月の勉強会は、現場でURAがどういう役割や活動ができるのかを考えようという趣旨で開催しました。今日のこのセッションに対し、この勉強会の議論がさらに発展するような内容を期待しております。

5月24日 勉強会スライド

## 「総合知」人社勉強会の背景

- 人文・社会科学系URAネットワーク幹事校(JINSHA)では、RA協議会スキルプログラム専門委員会の助成も受け、2021年9月～2022年8月に「総合知による社会変革」に向けた人文・社会科学振興と研究支援に関する勉強会を開催。
- 2021年12月22日は、内閣府科学技術・イノベーション推進事務局にて検討が行われている「総合知戦略」について、そのとりまとめを行っている佐野泰三氏から個人の見解をお話いただき、ディスカッションを通じて人文・社会科学系URAネットワーク関係者の共通理解を得ることを目的とした会合を実施。
- 今回は、“総合知とは何か”で思考停止するのではなく、異なる分野やセクターを組み合わせ、噛み合うようにして、社会変革や重要な問いに取り組みうるプロジェクトを立ち上げ、動かしていくことが大事という視点に立ち、URAはどのような役割や活動ができるのか検討。
- 本日の内容は、2022年8月末に開催されるRA協議会 第8回年次大会でJINSHAメンバーが担当するセッションに引き継いで、さらに議論を発展させる予定。

次のスライドは今年3月に公表された『「総合知」の基本的考え方及び戦略的に推進する方策 中間とりまとめ（ポイント）』を転載させていただいたものです。何が書いてあるかという点、例えば「総合知」の基本的な考え方として、「総合知」とは「多様な『知』が集い、新たな価値を創出する『知の活力』を生むことである」、あるいは左下、「総合知」の活用イメージとしては、「属する組織の『矩』を超え、専門領域の枠にとらわれない多様な『知』を持ち寄り」ところから始まって、将来的には目指す未来を実現できるようにバックキャストでビジョンを形成したり、課題を整理したり、連携による課題解決を図っていくといったところで「総合知」が活用される、というようなことです。

## 「総合知」の基本的考え方及び戦略的に推進する方策 中間とりまとめ (ポイント)

2022.3  
内閣府 総合知推進部

第6期科学技術・イノベーション基本計画を踏まえ、総合科学技術・イノベーション会議有識者議員懇談会での検討を経て、本年3月に中間とりまとめ。

### いま、なぜ、「総合知」が必要なのか

世界の研究や技術開発の目的の軸足が、「持続可能性と強靱性」、「国民の安全と安心の確保」に加えて、「一人ひとりが多様な幸せ (well-being) を実現できる社会」に移りつつある。

我が国の科学技術やイノベーションが、世界と伍していくためには、「あらゆる分野の知見を総合的に活用して社会の諸課題への的確な対応を図る」ことが不可欠。



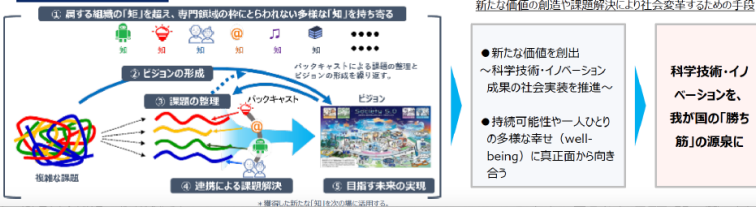
### 「総合知」の基本的考え方

#### 総合知

#### 多様な「知」が集い、新たな価値を創出する「知の活力」を生むこと

- 多様な「知」が集うとは、属する組織の「短」を超え、専門領域の枠にとらわれない多様な「知」が集うこと。
  - 新たな価値を創出するとは、安全・安心の確保とWell-beingの最大化に向けた未来像を描くだけでなく、科学技術・イノベーション成果の社会実装に向けた具体的な手段も見出し、社会の変革をもたらすこと。
- これらによって「知の活力」を生むことこそが「総合知」であり、「総合知」を推進し進めることが、科学技術・イノベーションの力を高める

#### 総合知の活用イメージ



(図の出典) <https://www8.cao.go.jp/cstp/sogochi/index.html>

6

ここから、5月の勉強会について具体的に報告していきます。160名もの申込がありました。表の中の青字は、JINSHAメンバーの所属組織名ですが、その内輪に限らず、資金配分機関の方や企業関係者の方含め、多様な組織の方が参加してくださいました。

勉強会の目的としては、まずはJINSHAメンバーからの「総合知」に関連する事例14件のピッチ発表をもとに、「総合知」創出において人文・社会科学の「知」を盛り込む際の課題や、URAの関わり等の現状をまず読み解くこと、そして読み解いた結果をURA業務にどのように活かしていくのか、その方法について議論を深めようということに設定しました。

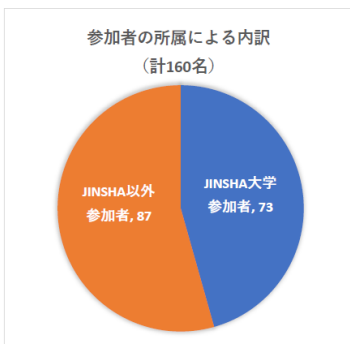
この勉強会で扱った事例は、「総合知」の事例としてお話しただいたものもあれば、「総合知」を考えるに当たって参考になる事例としてお話しただいたものもあるということにご留意ください。共通のお題として「社会変革や社会課題への取り組みであること」、「人文・社会科学系研究者が



関与していること」、「まだ結果が出ていない、好事例として言えるようなものでなくてもよい」を条件に、事例発表していただきました。

5月24日 勉強会スライド

## 申込者数・内訳 (2022年5月24日正午現在 計160名)



| 参加者数 (160) | 所属機関名  |
|------------|--|
| 19         | 科学技術振興機構   |
| 18         | 東京大学   |
| 9          | 京都大学   |
| 7          | 早稲田大学  |
| 6          | 北海道大学、琉球大学、九州大学、防災科学技術研究所  |
| 5          | 筑波大学、人間文化研究機構、京都大学学術出版会  |
| 4          | 横浜国立大学、新潟大学、東北大学、東京工業大学  |
| 3          | 広島大学、神戸大学、長崎大学、名古屋市立大学   |
| 2          | 大阪大学、中央大学、内閣府、文部科学省、東京外国語大学、青山学院大学、慶應義塾大学、関西大学、学習院大学、同志社大学   |
| 1          | お茶の水女子大学、政策研究大学院大学、名古屋大学、公立大学法人大阪、神奈川県立保健福祉大学、東京都立大学、中部大学、立命館大学、帝京大学、大正大学、東北福祉大学、広島経済大学、IDE-JETRO、高エネルギー加速器研究機構、九州大学出版会、副総合科学研究機構、㈱ハロモナス、フーランス、NHK、ご所属なし |

青字：人文・社会科学系URAネットワーク幹事校（JINSHA）

5月24日 勉強会スライド

## 本日の目的とプログラム

司会：丸山（早稲田大学）

テーマ：総合知をつくる知のマネジメント-URAに求められる活動を考えよう！-

### < 今回の目的 >

JINSHAメンバーからの「総合知」に関連する各事例発表をもとに、「総合知」創出において人文・社会科学の知を盛り込む際の課題やURAの関わり等の現状を読み解く。読み解いた結果をURA業務にどのように活かしているか、その方法の議論を深める。

16:00-16:05 開会・趣旨説明：川人（阪大）

16:05-16:55 JINSHAメンバーから「総合知」に関連する事例ピッチ発表14件、3分ずつ

お題：「社会変革や社会課題への取り組み」「人文・社会科学系研究者の関与」（既に入社イベントをもたらしただけの好事例に限らない）

16:55-17:00 休憩

17:00-17:25 質疑応答・ディスカッション

17:25-17:30 まとめ：丸山（早大） ※最長18:00まで延長の可能性あり

<https://forms.gle/6a8fh9FtLVnPF1bA>から、皆さまのコメントをお寄せください！

- 本勉強会は、記録のため録音させていただきます。参加者の方による録音・画面キャプチャ・録音はご遠慮ください。

事例発表リストはこちらです。私のほうでごく簡単にご紹介しますと、①番（中央大学）と⑥番（新潟大学）はともに ELSI センターに関する事例で、それぞれ異分野や異セクターとの連携や、科学コミュニケーションに URA が関わっている、というお話がありました。②番（東京大学）では学内の URA にアンケートをとられたそうで、多様な分野に関する「総合知」の事例をご紹介いただきました。④番（早稲田大学）は外部資金関連で、ムーンショット採択のプロジェクト立ち上げに企画段階から URA が入ったというお話、③番（人間文化研究機構）では、東北大学と神戸大学と協定を組み、地域の歴史資料の保全や災害からのレスキューというような実際の活動、あるいは人材育成のお話もありました。⑤番（京都大学）は、後で紹介があるので割愛させていただきます。⑦番（大阪大学）の事例では、ダイキンさんとの共同研究のテーマ検討に人社系の先生方にも入ってもらうための試みと、豊中地区研究交流会という「場」で URA が果たしている役割についてお話ししました。

5月24日 勉強会スライド

## 事例発表リスト1

- ① 産業界との運動・連携：共創の場としてのELSIセンター  
➢ 三田香織（中央大学 研究推進支援本部）
- ② 東大URAが考える「総合知」とは？  
➢ 平澤加奈子（東京大学 史料編纂所）
- ③ 人文知から総合知へー人間文化研究機構における歴史文化資料保全ネットワーク事業の取組  
➢ 押海圭一（大学共同利用機関法人 人間文化研究機構）
- ④ 「健康な土壌と食」の社会受容に向けた総合知～早稲田が取り組むムーンショット事業～  
➢ 丸山浩平（早稲田大学 研究戦略センター）
- ⑤ 人社系研究リソースの可視化と総合知～京都大学人社系総合ハブサイト「Rethinking the Future 未来を再考する人社系」～  
➢ 稲石奈津子（京都大学 学術研究支援室（KURA））
- ⑥ 人文社会科学系から身近な異分野融合を探るー新潟大学ELSIセンターの設立  
➢ 李香丹（新潟大学 研究企画室）
- ⑦ 多様な知が“混ざりやすくなる”には～「阪大・ダイキン共同研究テーマ検討」と「大阪大学豊中地区研究交流会」での試み  
➢ 川人よし恵（大阪大学 経営企画オフィスURA部門）、山田綾子（大阪大学 大学院法学研究科）

2枚目の事例発表リストです。ここでも外部資金関係が複数あります。⑫番（北海道大学）ではJSTのCOI-NEXTの採択課題で、地方都市における少子化の克服をテーマにした事例の報告が、また⑬番（筑波大学）ではムーンショットミレニア支援のお話がありました。地域課題に関して、⑨番（琉球大学）は、火災で焼失した首里城の再興への取り組みのお話、⑭番（神戸大学）では、社会老年学を中心とした地域課題解決への取り組み事例について、地域自治体や企業、他の研究機関等とのつなぎ役を果たされたというご紹介がありました。また、⑩番（横浜国立大学）の事例は、7年ぐらい前から学内の異分野連携グループの立ち上げ支援をURAがされてきて、学内ファンドもつくっているというお話でした。⑪番（東北大学）では、災害をテーマにしたレジリエンス共創センターで、人社系の先生がどのように関わっているかについてご紹介がありました。⑦番（広島大学）では、JSTのSPRINGプログラムにおける、博士課程学生の支援と「総合知」に関する悩みという課題の共有がなされました。

5月24日 勉強会スライド

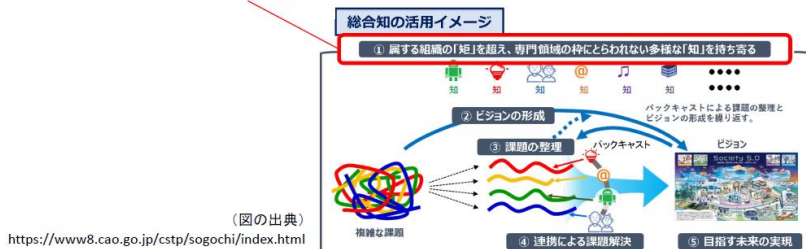
## 事例発表リスト2

- ⑦ 総合知と自律性～博士人材育成・支援プログラムの運営上の悩み
  - ▶ 三代川典史（広島大学 未来共創科学研究本部研究戦略推進部門）
- ⑨ 琉球文化ルネサンス～総合知による首里城再興への琉球大URAの取り組み
  - ▶ 島袋真澄（琉球大学 研究推進機構研究企画室）
- ⑩ 「総合知」を活かす社工連携グループ形成支援の取組
  - ▶ 矢吹命大（横浜国立大学 大学戦略情報分析室／研究推進機構）
- ⑪ オールハザードアプローチによる防災（リスク減少）-東北大学 災害科学国際研究所 災害レジリエンス共創センターが目指す「防災総合知」の創造-
  - ▶ 臼澤基紀（東北大学 URAセンター）
- ⑫ 北海道の地方都市における少子化の克服に向けて～COI-NEXTによる挑戦～
  - ▶ 田中晋吾（北海道大学 大学力強化推進本部研究推進ハブURAステーション）
- ⑬ ムーンショットミレニアを支援して
  - ▶ 齊藤愛（筑波大学 URA研究戦略推進室/人文社会系エリア支援室）
- ⑭ 総合知活用のための人社系URAの支援内容の拡大～社会老年学を中心とした地域課題解決への取り組み事例～
  - ▶ 平田充宏（神戸大学 学術研究推進機構 学術研究推進室）

勉強会で共有した事例で、URA がどんな役割を果たしていたのかについて、箇条書きにしてまとめてみると、内閣府の「総合知」の活用イメージの、主に「①属する組織の『矩』を超え、専門領域の枠にとらわれない多様な『知』を持ち寄る」に関する話がメインだったと理解しています。課題解決の資源やアクターを可視化する、異分野交流イベントを開催する、いろんな人々が議論する場の企画・ファシリテーションをする、実際の連携先を調整する、学内ファンドの仕掛け等をする、外部資金獲得も1つの契機としてチーム形成を支援する、活動基盤となるセンターの立ち上げや運営を支援する、というようなことです。もちろん「①属する組織の…」だけではなく、実際のプロジェクト運営等でビジョンを形成する(⇒②ビジョンの形成)、課題解決に關与する(⇒③課題の整理、④連携による課題解決)ところまで関わる事例も複数ありました。

## 勉強会で共有した事例における URAの役割(多様なつなぎ役+α)

- 課題解決の“資源”や“アクター”の可視化
- 異分野交流イベント開催
- 異なる背景・所属の人々が議論する場の企画・ファシリテーション
- 他大学・自治体・企業等、新たな連携先の調整
- 学内ファンド等の仕掛け作り
- 外部資金獲得を契機にしたチーム形成支援
- 活動基盤となるセンター立ち上げ・運営支援 など



11

勉強会参加者からのアンケート回答例を少しだけ紹介しますと、「総合知」に関連して、URAが一定の役割を果たすことが期待されているし、既に果たしつつあるという声もありました。つなぐ役割だけではなくて、促す一人系研究者が研究の範囲を広げることに視野を向ける促しーというの、大事ではないかというところ。あるいは異分野、専門外をリスペクトできる開いた態度、相手に敬意を払うことでうまくコミュニケーションがとれ、安心感を持って参画できるというところ。これは、これまでの学際連携、異セクター連携等でも課題になっていたことかと思いますが、ここについての役割も期待されていると思われます。文字通り総合的に支援する、フルストーリーで考えてゼロベースからチームビルディング等を行っていく、というご意見もありました。

## 勉強会参加者と「総合知」 (参加者アンケート回答例の紹介①)

「総合知」に関し、URAが一定の役割を果たすことが期待されている  
(既に一定の役割を果たしつつある?)

- 分野横断的なプロジェクト形成に、URAの存在は不可欠だと思います。社会課題の解決については、自治体などの連携も必要なことから、そこでもURAが橋渡しできると益々活躍の領域が広がるのではないのでしょうか。(大学関係者)
- 人系研究者が研究の範囲を広げることに視野を向ける促し(大学関係者)
- 異分野、専門外をリスペクトできる開いた態度をスキルとして具現化すること、でしょうか。異分野が混ざる対話の場では、真っ先に素人質問をして心理的安全を醸成する人が必要そうです。(資金配分機関関係者)
- URAは課題ドリブンのソリューションとしての「総合知」をフルストーリーで考え、その結果、このための研究チームビルディングをゼロベースから行うことが理想で、単に自然科学系教員と人文・社会科学系教員をつなぐのみではうまくいかないように思う。(大学関係者)

つなぐ

促す

安心感を与える・敬意を払う

総合的に支援する

「総合知」創出において人文・社会科学の「知」を盛り込む際の課題としては、人材の可視化や多様な人が活躍しやすい仕組みづくり、あるいは、「知」を混ぜる方法の高度化、好事例の積み重ね、マインドセットを変えていく必要性といったことが挙げられました。また、得意なことを生かすこ

とを考える必要があり、「ELSI だから人社系」といったことではなく、例えば物事を体系化することに長けているといった強みを生かすことが必要ではないか、というご意見もありました。

## 勉強会参加者と「総合知」 (参加者アンケート回答例の紹介②)

### 「総合知」創出において人文・社会科学の知を盛り込む際の課題

- 直ぐに何かの役に立つような研究をしている人のほうが少ない中で、あるお題に対して、自らが携わる分野の知識で何が出来るかということを考えたり、思いついたことを気楽に表明してもらえそうな仕組みを学内に作り、それが習慣づいたらよいのではないか。(大学出版関係者)
- 研究者のマインドセットでしょうか。文系の研究者の中には、たとえばSDGsや社会の課題解決、という言葉に、過去の経緯もあり拒否反応を示す方も少なくありません。また、依頼されてプロジェクトに参画したものの、現実的には自然科学系の研究者主導であり自分が参加する意義を感じられなかったという声もききます。共創の場形成支援事業などで、人文・社会科学系と自然科学系の研究者が双方力を発揮できる研究プロジェクトや拠点形成などの好事例を積み上げていくことが重要かと思います。その際には、URAの力が不可欠だと感じています。(大学関係者)
- 人社の特徴は物事を体系化することに長けている点だと思います。プロジェクトの根幹にかかわるビジョンやデザインを構築することに実は向いているけれども、その価値に気が付いていなかったり、面倒だと思っていたりするところを、楽しく取り組んでもらえるようなサポートができればと常日頃考えています。(大学関係者)

人材の発掘・  
活躍しやすい  
状況づくり

「知」を混ぜる方  
法・意識づけ

人社系の  
役割再考

新澤さんからは、川人の役割として「モヤモヤの共有」とおっしゃっていただきました。勉強会の事例報告は参加者の方々に好評をいただきましたが、他方、「総合知」に関して今後特に議論を深めるべきと思われる論点として、「やはり『総合知』の定義が気になる」「そもそも『総合知』で解決したいこと・生み出したいことがあってこそその『総合知』ではないか」というご意見もありました。あるいは、「総合知」を進めるために必要なことや、人社系と異分野等の融合のあり方については議論が足りない、どう評価するのかという観点も必要、それから、若手研究者・学生と「総合知」について、「やはり若い世代から変えていくべきではないか」という声もありました。

## 勉強会参加者と「総合知」 (参加者アンケート回答例の紹介③)

「総合知」に関して、今後特に議論を深めるべきと思われる論点

- 「総合知」の定義
- 「総合知」で解決したいこと・生み出したいことは何か
- 「総合知」を進めるために必要なことは何か
- 人社系と異分野等の融合のあり方やその方法
- 「総合知」の成功事例・評価
- 若手研究者・学生と「総合知」
- URAと「総合知」 など

もちろん URA と「総合知」についてもまだまだ議論が足りないと思いますので、今日のセッションでさらに議論が深められればいいなと思います。

### 「総合知」に関連する国内外の動向例

ここからは「総合知」に関連する国内外の動きについてです。

2014 年から 2020 年の EU の資金配分プログラム Horizon 2020 では、Societal Challenges、社会的課題の枠において、統合アプローチ (integrated approach) という言葉で、人社系研究者もプロジェクトに参画することが推奨されるという大きな変化がありました。

その背景になっているのは、2013 年にリトアニアのビリニュスで開催された EU の国際会議で採択された「ビリニュス宣言」です。私自身、この国際会議に調査で参加させてもらいましたが、研究を新たな地平を開拓していくために人社系自身がどのように Horizon 2020 に関わっていけるかという熱い議論がボトムアップでなされているのが非常に印象的でした。EU の資金配分プログラムにより人社系研究者を組み込んでいこうというボトムアップの動きが、Horizon 2020 の Societal Challenges という新しい枠組みにつながりました。

# 参考:「総合知」に関連する国内外の動向例 欧州① Horizon 2020



## 社会的課題

- 保健、人口構造の変化および福祉
- 食糧安全保障、持続可能な農業およびバイオエコノミー等
- 安全かつグリーンで、効率的なエネルギー
- スマート、環境配慮型かつ統合された輸送
- 気候への対処、資源効率および原材料
- 包括的、イノベティブかつ内省的な社会の構築
- 安全な社会の構築

(図の出典) <https://www.eu-japan.eu/sites/eu-japan.eu/files/B.%20H2020%20for%20international%20audience-woolgar.pdf>

15

# 参考:「総合知」に関連する国内外の動向例 欧州② Vilnius Declaration, 2013

**VILNIUS DECLARATION**

**Vilnius Declaration - Horizons for Social Sciences and Humanities**

Europe will benefit from more investment in research and innovation and Social Sciences and Humanities (SSH) are widely recognised. European societies expect research and innovation to be the foundation for growth. Horizon 2020 aims to implement better disciplinary and interdisciplinary scientific approach. Research to serve society, a resilient partnership with all relevant actors is required. Another source of funding for SSH requires that there are robust research and taught in their own right as well as in partnership with other disciplinary approaches.

**The value and benefits of integrating Social Sciences and Humanities**

European Social Sciences and Humanities are a world-class, especially considering their diversity. They are indispensable, generating knowledge about the dynamic changes on human related domains and knowledge that transform our societies. They are engaged in research, design and creation of practical solutions to our future and Sustainable Socio-Economic. That integration into Horizon 2020 offers a unique opportunity to broaden our understanding of innovation, addressing issues with ongoing changes in the way which society operates.

1. Innovation is a matter of change in organisations and institutions as well as technologies. It is driven not only by technological advances, but also by social expectations, values and demands. Making use of the wide range of knowledge, capabilities, skills and experiences readily available in SSH and making innovations to become embedded in society and is necessary to realise the policy aim proclaimed in the "Social Challenges".
2. Fostering the effective collaboration between disciplines is a vital dimension. This can be achieved through innovative participatory approaches, empowering European citizens in their own context, but through participation of citizens in the institutional or production of culture, as agents in endangered environments, and/or as voters in European democracies.
3. Policy making and research from both sides (SSH knowledge and technologies). The latter leads to new perspectives on identifying and tackling societal problems. SSH can be instrumental in helping societal actors and scientific researchers better understand.
4. Drawing on Europe's most precious cultural assets, SSH play a vital role in redefining Europe in a globalising world and enhancing its attractiveness.
5. Therefore, SSH thinking is a precious resource for all of Europe's future research and innovation initiatives. It is a unique, irreplaceable resource that offers the opportunity for the first time.

Vilnius Declaration

**VILNIUS DECLARATION**

**Conditions for the successful integration of Social Sciences and Humanities in Horizon 2020**

6. Recognising knowledge diversity. Solving the most pressing societal challenges requires the appropriate inclusion of SSH. This can only succeed on a basis of mutual intellectual and professional respect and genuine partnership. Efficient integration will require novel ways of defining societal problems, such as an appropriate mix of interdisciplinary methods and theoretical approaches. SSH approaches continue to foster practical applications that enhance the effectiveness of such solutions.
7. Collaborating effectively. The working conditions of all research partners must be carefully considered from the beginning and appropriate aligned to set up efficient collaboration across different disciplines and research fields. This includes adequate organisational and administrative arrangements, as well as incentives for researchers in both society and academia. Organizational conditions must be appropriate to achieve this goal.
8. Fostering interdisciplinary training and research. Integrating SSH with the natural and technical sciences must begin with fitting approaches in post graduate education and training. Innovative curricula foster a personal understanding of the value of different disciplinary approaches, and how they relate to real world problems.
9. Covering social values and research evaluation. Policy-makers rightly note that the impact of publicly funded research and its benefits for society and the economy should be assessed. Accurate research evaluation that values the breadth of disciplinary and interdisciplinary approaches is required to tackle the most pressing societal challenges.

Agreement with the principles of the Vilnius Declaration should be made the basis for the integration of the SSH into Horizon 2020.

**Steering Committee**

|                     |                   |
|---------------------|-------------------|
| Helga Klenzinger    | Paul Hain         |
| Helga Klenzinger    | David Caine       |
| Gediminas Vilnaitis | Alan Perle        |
| Julia Mollenberger  | Alexa Triggiani   |
| Paul Hain           | Oliver Schneider  |
| Craig Calhoun       | Wim van den Daele |
| Outsaver Carobon    | Michiel Willems   |
| Riku Isotalo        | Signe Wittrock    |

Vilnius Declaration

(図の出典) [https://erc.europa.eu/sites/default/files/content/pages/pdf/Vilnius\\_SSH\\_declaration\\_2013.pdf](https://erc.europa.eu/sites/default/files/content/pages/pdf/Vilnius_SSH_declaration_2013.pdf)

16



Net4Society は、EU の資金配分プログラムに人社系が参画するときのサポートを行っているプロジェクトで、2008 年に立ち上がりました。Net4Society は現在の Horizon Europe の支援を受けて継続していますが、こうしたある意味 URA 的な機能、研究者をつなぐコーディネートを行うような機能がしっかりしていることも、「総合知」を生み出していくためには重要だと考えています。

## 参考: 「総合知」に関連する国内外の動向例 欧州③ Net4Society

The screenshot shows the Net4Society website with the following content:

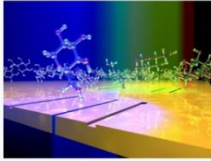
- About us:** Net4Society is the international network of National Contact Points for Cluster 2 ("Culture, creativity & inclusive society") in Horizon Europe. National Contact Points (NCPs) are set up to guide researchers in their quest for securing EU funding. Net4Society was originally founded in 2008 during the 7th European Research Framework Programme (FP7, 2007-2013) as the network of National Contact Points for Socio-Economic Sciences and the Humanities (SSH). During Horizon 2020, the European Framework Programme for Research and Innovation (2014-2020), Net4Society was comprised of National Contact Points for the Societal Challenge 6 "Europe in a changing world: inclusive, innovative and reflective societies", a programme part of Horizon 2020 that was to a large extent driven by SSH research aspects. We actively support networking in the SSH research community and offer help in every respect of Horizon Europe consultation. Net4Society includes the European and International National Contact Points of more than 53 countries. A specific focus of Net4Society is on supporting the successful integration of Social Sciences and Humanities (SSH) throughout Horizon Europe. Net4Society is open to all National Contact Points for Cluster 2 "Culture, creativity & inclusive society".
- Research community:** We support networking among SSH researchers & help with the drafting of proposals.
- SSH integration:** We promote successful integration of SSH research throughout Horizon Europe.
- Impact & Visibility:** We foster visibility of SSH research & awareness of societal impact.
- SSH Integration in Horizon Europe:** "Social sciences and humanities research will be fully integrated into each of the priorities of Horizon Europe and each of the specific objectives and will contribute to the evidence base for policy making at international, Union, national, regional and local level. In relation to global challenges, social sciences and humanities will be mainstreamed as an essential element of the activities needed to tackle each of the global challenges to enhance their impact."
- Background: A few definitions and a plea for a new understanding of SSH Integration:** Horizon Europe aims at including the SSH as a cross-cutting issue and consequently it is embedded into each pillar and objective of Horizon Europe. The idea is to fully integrate the STEM (science, technology, engineering and mathematics) disciplines together with the SSH tackling the complex societal issues of European societies. The Socio-economic sciences and Humanities include a wide range of disciplines, encompassing sociology and economics, psychology and political science, history and cultural sciences, law and ethics. **Interdisciplinarity:** "Integration of information, data, techniques, tools, perspectives, concepts or theories from two or more disciplines. Disciplines may be from the natural sciences, technology, engineering, economics, Social Sciences and Humanities, LL."

(図の出典) <https://www.net4society.eu/en/About-us-1785.html>  
<https://www.net4society.eu/en/SSH-Integration-in-Horizon-Europe-1844.html> 17

米国の動きについては、Convergence Research や、日本でも話題になっている STEAM 教育も、“総合する”という点で関連するのではないかと思います。

# 参考:「総合知」に関連する国内外の動向例 米国① Convergence Research

## What is convergence research?



Engineers at Brown University have designed a bioschip that can measure glucose concentrations in human saliva. In this illustration, glucose molecules hover in a sensor surface. Illuminated by light, the technique takes advantage of a convergence of nanotechnology and surface plasmonics, which explore the interaction of electrons and photons. Credit: Domenico Pacifici, School of Engineering, Brown University

Convergence research is a means of solving vexing research problems, especially those focusing on societal needs. It has two primary characteristics:

- **It is driven by a specific and compelling problem**, whether that problem arises from deep scientific questions or pressing societal needs.
- **It shows deep integration across disciplines**. Convergence research intentionally brings together intellectually diverse researchers to develop effective ways of communicating across disciplines. As experts from different disciplines pursue a common research challenge, their knowledge, theories, methods, data and research communities increasingly intermingle.

New frameworks, paradigms or even disciplines can emerge from convergence research, as research communities adopt common frameworks and a new scientific language. In this sense, convergence research is similar to transdisciplinary research, which is seen as the pinnacle of integration across disciplines.

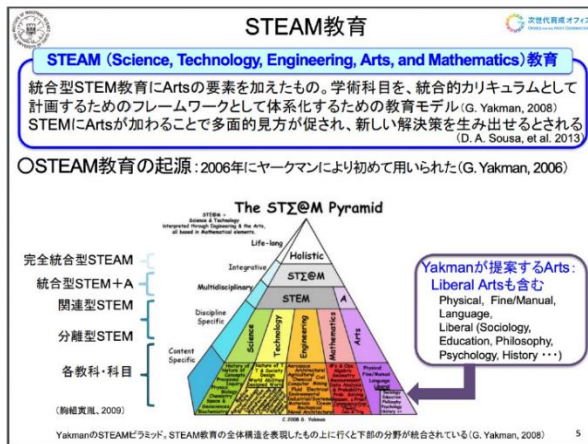
### Examples of convergence research:

|                         |   |
|-------------------------|---|
| Cyber-physical systems  | + |
| Understanding the brain | + |
| Synthetic biology       | + |

(図の出典) <https://beta.nsf.gov/funding/learn/research-types/learn-about-convergence-research>

18

# 参考:「総合知」に関連する国内外の動向例 米国② STEAM教育



(図の出典) [https://www.mext.go.jp/content/20200917-mxt\\_kyoiku01-000009959\\_4.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20200917-mxt_kyoiku01-000009959_4.pdf)

19

## このセッションに期待すること

この後、稲石さんと齋藤先生がお話しくださいますので、人社系研究者とURA、両視点からの議論の発展が期待できると考えています。特に、当事者として、さらには他の関係者の方々にも議論の輪が広がっていくような、そんな2つの方向で話ができると嬉しいなと思っています。

また、URAとしての業務はやはりどんどんアップデートしていく必要があって、そのきっかけが得られるのではないかとすることも期待するポイントです。「総合知」というのはそもそも目的ではなくて手段であるはずですので、URAに期待されつつある業務やその手段という観点でも、セッションの議論が進むことを期待しています。

## このセッションに期待すること

- 人文系研究者とURA、両視点からの議論の発展
  - ✓ 当事者として
  - ✓ 他の関係者にも議論の輪が広がるように
- URAとしての業務をアップデートしていくきっかけ
  - ✓ 変わりゆくURAへの期待
  - ✓ 「総合知」は目的ではなく手段

# 人文・社会科学系研究リソースの可視化と総合知

京都大学学術研究支援室（KURA） 稲石 奈津子

京都大学学術研究支援室の稲石と申します。通称 KURA といっていますが、KURA 人社系グループで、人社系の支援を担当しております。

RA協議会第8回年次大会  
[F-3] 最近よく聞く「総合知」って何？—人文・社会科学の視点から—

## 人文・社会科学系研究リソースの可視化と総合知

2022年8月31日  
京都大学 学術研究支援室（KURA）  
人社系グループ  
稲石 奈津子

京都大学



KYOTO UNIVERSITY

本日のお話の流れですが、大きく3つあります。1つが今までの異分野融合・学際研究に関する背景と「総合知」。2番目が人文・社会科学系研究の成果発信と可視化。3番目が本日のお話の主だったところですが、社会課題解決に向けた人文・社会科学系研究リソースの可視化のお話になります。

- 1 今までの異分野融合・学際研究に関する背景と「総合知」
- 2 人文・社会科学系研究の成果発信・可視化
- 3 社会課題解決に向けた人文・社会科学系研究リソースの可視化

## 今までの異分野融合・学際研究に関する背景と「総合知」

先ほど川人さんから、「総合知」勉強会の報告がありました。その時の参加者からのご意見で、「総合知」の定義とは何かが気になる方がかなりいらっしゃるといことが分かりました。また、超学際・トランスディシプリナリー研究（TDR）や、JSTのRISTEXで進められてきた学際・社会課題解決型、社会実装型研究というものがありますが、それとは何が違うのかといったご質問もありました。

「総合知」勉強会での意見や質問から

今までの異分野融合・学際研究に関する背景と「総合知」 1

- ・ 「総合知」の定義とは何か
- ・ 従来もあった超学際・トランスディシプリナリー研究（TDR）や、JSTのRISTEXで進められてきた学際・社会課題解決型・社会実装型研究とは何が違うのか

これに関しては、内閣府の『「総合知」の基本的考え方及び戦略的に推進する方策 中間とりまとめ』にある程度書かれています。「多岐にわたる社会課題を抱えており、科学技術イノベーション政策に対する社会や国民から高い期待が寄せられている。こうした課題に対応するため」とあります

「総合知」の基本的考え方及び戦略的に推進する方策

今までの異分野融合・学際研究に関する背景と「総合知」 1

### <中間取りまとめ>（案）（令和4年2月10日・内閣府 科学技術・イノベーション推進事務局） はじめに（中間とりまとめの位置づけ）

・ 令和3年4月から施行された科学技術・イノベーション基本法では、従来、対象としていなかった人文・社会科学のみに係るものが法の対象とされ、あわせて、あらゆる分野の知見を総合的に活用して社会課題に対応していくという方針が示された。これは、科学技術・イノベーション政策が、人文・社会科学と自然科学を含むあらゆる「知」の融合による「総合知」により、人間や社会の総合的理解と課題解決に資する政策となることの必要性とその方向性を指したものである。

我が国は、気候変動などの地球規模課題への対応や、レジリエントで安全・安心な社会の構築などの問題、少子高齢化問題、都市の過密と地方の過疎の問題、食料などの資源問題といった多岐にわたる社会課題を抱えており、科学技術・イノベーション政策に対する社会や国民から高い期待が寄せられている。

こうした課題に対応するため、自然科学のみならず人文・社会科学も含めた多様な「知」の創造と、「総合知」による現存の社会全体の再設計、さらには、これらを担う人材育成が避けては通れない状況となっている。

ので、やはりこの社会課題に対応するという点が一番大きなポイントになるのではないかと思います。

これからもわかるように、「総合知」をどう捉えるか、その重要性は定義を明確かつ厳密にすることより、なぜ「総合知」ということが言われているのか。その背景と目的、必要性を意識することがまず重要なのではないかと個人的には思います。その次に、では何が課題なのか、解決すべきテーマは何かという点、ここがやはり「総合知」を考える上で重要なポイントだと思っています。

もちろん、社会課題解決に向けたファンドや施策というものも、これまでにいくつか実施されています。TDRとかRISTEXといった、今まで取り組まれてきたものと何が違うかという点、これは変わるものではなくて、政策的な再定義という面があるのではないかと思います。ある種「総合知」というコピーを付けたことによって、より社会的に理解されやすい、それに向かって行きやすくなる旗印のような面、政策的な誘導を感じられる面があると思います。

個人的には、学際・異分野融合というと学術的ものが念頭にありますが、「総合知」の創出といった場合、まず社会課題解決という目的があること、そしてアカデミア以外の多様なステークホルダーとの協働により、その目的を達成しようとするものであると位置づけています。

#### 「総合知」をどう捉えるか

今までの異分野融合・学際研究に関する背景と「総合知」 1

- ・なぜ「総合知」ということが言われているのか、その背景と目的、必要性
- ・解決すべきテーマは何かという点の重要性
- ・TDRやRISTEX  
政策的な再定義という面
- ・従来の学際・異分野融合研究との違い  
社会課題解決という目的  
アカデミア以外の多様なステークホルダーとの協働

ここで、少し今までの異分野融合・学際研究に関しての議論を振り返ってみたいと思います。次のスライドは2年前のRA協議会の時に、北海道大学主催で「異分野融合、学際研究」がテーマのセッションをオーガナイズされたときのスライドです。ここで、文科省の人社系ワーキングの審議まとめの自然科学との連携・協働とその課題に関して引き合いに出していますが、本来手段であるはずの事柄それ自体が目的化してしまう恐れについて述べています。私としては、2年経ってもこの考えは変わらず、むしろ強固になっていて、「そもそも本来の目的や解決すべき課題は何か」という点が重要であるという点を再認識しています。

「総合知」以前の議論  
ー異分野融合・学際研究について

今までの異分野融合・学際研究に関する背景と「総合知」 1

第6回RA協議会年次体会合セッション  
F-1プロジェクトのマネジメント  
「異分野融合研究・プロジェクトにおけるURAの役割について考える」  
人社系の関わる事例紹介と今後の共創研究に向けて（2020年9月18日）

**（科学技術と社会の調和に向けた自然科学との連携・協働とその課題）**

これまでも自然科学との連携・協働は複数の場において進められているが、そうした実践の場面においては、経験的にいくつかの困難が見出されている。

例えば、連携や協働という**本来手段であるはずの事柄それ自体が目的化してしまうこと**や、連携・協働の組み合わせにより**比較的解決しやすい問題に傾いて本来意図する研究のスケール感が失われることがあること**、また、実際に問題が生じる場となる**自然科学による問題設定が主導する形となって人文学・社会科学の研究者が自身の専門性との関連においてインセンティブを持ちにくいこと**、などが挙げられる。

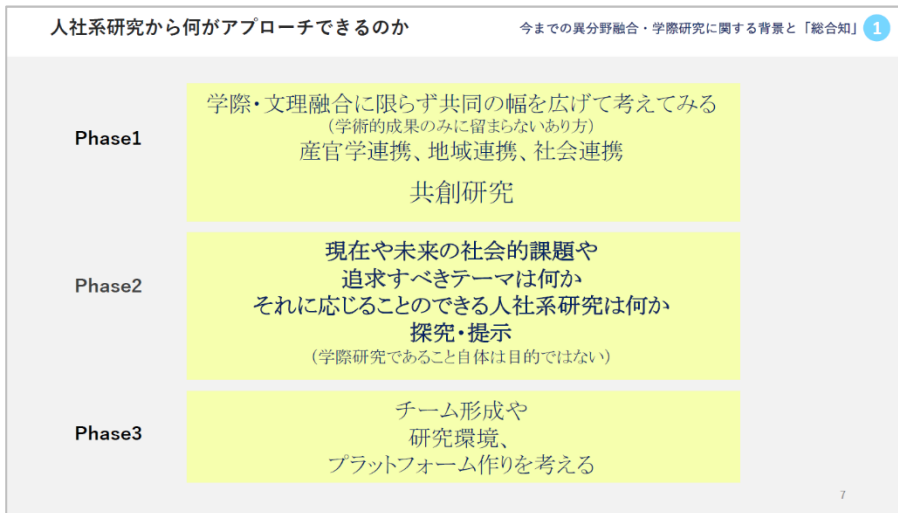
FROM：科学技術・学術審議会 学術分科会  
人文・社会科学振興の在り方に關するワーキンググループ  
「人文学・社会科学が先導する未来社会の共創に向けて」  
（審議のまとめ）（平成30年12月14日）

そもそも本来の目的や  
解決すべき課題は何か？

6

先ほど川人さんのお話にもありましたが、「総合知」は手段であって目的ではないのではないかというのがまず1つ。そもそもの目的は何か、解決すべき課題は何かというところが重要で、そこがあるから「総合知」ということが言われてきているのではないか。「総合知」という言葉や定義に惑わされずに、まずはそれが生まれてきた背景を意識することが必要なのではないかと思います。

次も 2 年前のセッションのときの資料です。3 つの段階で示していますが、第 2 段階の「現在や未来の社会的課題や追求すべきテーマは何か、それに応じることのできる人社系研究は何かを探求・提示する」ことが、まず人社系研究においてできることではないかと考えました。その後が手段の部分で、チーム形成や研究環境、プラットフォームをつくるという段階に進むと思います。思うに、割とこの 3 番目の点に興味や議論が集中しているように思います。

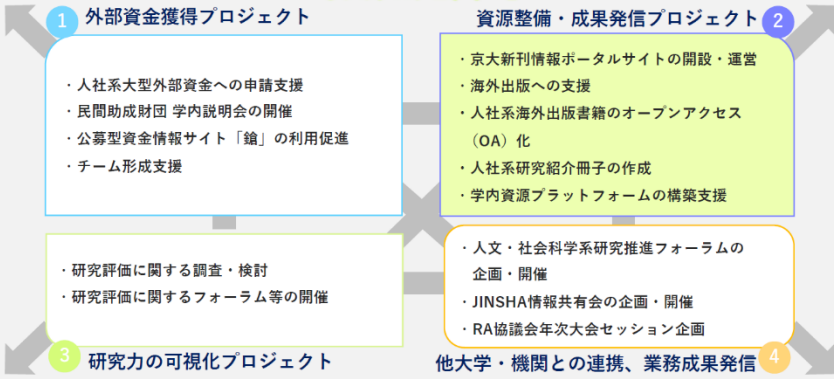


## 人文・社会科学系研究の成果発信・可視化

ここで、人文・社会科学系研究の成果発信・可視化に関して、今回中心に紹介するもの前段階となるような KURA の取り組みをご紹介しておきたいと思います。KURA の人文・社会科学系研究支援プログラムでは、「資源整備・成果プロジェクト」において人社系研究の可視化に何年か取り組んできました。可視化には研究評価の問題も含まれてきますが、これは 1 つ非常に大きなテーマとなるので今回は割愛し、成果発信のことをご紹介します。



人文・社会科学系研究を巡る課題解決に向けた、研究環境の整備  
3つのプロジェクト+1



1つは京大の新刊情報ポータルサイトというもので、5年半くらい実施しています。京都大学の先生が新刊書—論文ではなくて書籍—を刊行されると、こちらのポータルサイトに掲載して紹介しています。ただし、これは人文・社会科学系の先生のものだけではなく、理系を含め、京大の全ての先生の新刊書を漫画でも教科書でも何でも本であれば掲載するサイトです。

これをなぜ人社系プログラムでつくっているかというと、人社系研究に

京大新刊情報ポータルサイト

<https://pubs.research.kyoto-u.ac.jp>

**2021年度実績**

2021年度の新刊の掲載件数  
179冊  
(昨年度184冊)

英語化タイトル掲載件数累計  
160冊  
(昨年度136冊)

総掲載件数  
1,451冊  
(昨年度1,087冊  
(2022/3/2時点)  
掲載純増件数は364冊)

**ポータルサイトアクセス数**

2019年度  
閲覧数 16,473  
閲覧者数 13,466

2020年度  
閲覧数 20,530  
閲覧者数 17,905

2021年度  
閲覧数 19,705  
閲覧者数 16,895  
(2022/3/1時点)

Deep integration, global family, and Technology Spleasers

2021年度OA

オープンアクセス化した図書にタグ付け

京大新刊情報ポータル

ピックアップ

京大研究者の本


ピックアップニュース

新刊図書

とって、論文も重要ですが、特に書籍というのが非常に重要視されているためです。

もう 1 つ最近取り組んだ、人社系海外出版書籍のオープンアクセス化 (OA 化) 事業をご紹介します。人社系の先生の海外で出版された書籍をオープンアクセス化するという事業を、指定国立大学の人文社会科学の未来形発信の事業として実施できたものです。定量的には飛躍的にダウンロード数が増えたという成果はあるのですが、OA 化のメリットを先生方にインタビューしたところ、定性的な成果も非常に多くありました。詳しくは <https://ecr.research.kyoto-u.ac.jp/cat-c/c2/> にある先生方のインタビューをお読みいただければと思いますが、この件はまた後で少しお話しします。

### 人社系海外出版書籍のオープンアクセス (OA) 化事業



**OA化のメリット 定性的に見たOA化の成果**

- ・SDGs的な観点 (学術資源格差の是正)
- ・社会的インパクト (引用ではなく社会的貢献、教師により実際に教育現場で使用されるなど)
- ・教育への貢献 (学生が無償で入手できる)
- ・英語化、国際的成果発信への後押し (英語化や国際発信への意欲増)
- ・海外の潮流との同期 (ヨーロッパ圏での助成事業のOA化義務付け)

人文・社会科学系研究の成果発信・可視化 2

### OA化対象書籍・著者インタビュー公開

「研究者の歩きかた」サイトに  
インタビュー4本掲載 (日・英)

- (1) 教育学研究科 Emmanuel Manalo 教授  
日本語 <https://ecr.research.kyoto-u.ac.jp/cat-c/c2/1617/>  
英語 <https://ecr.research.kyoto-u.ac.jp/en/cat-c/c2/1617/>
- (2) 文学研究科 横地優子 教授  
日本語 <https://ecr.research.kyoto-u.ac.jp/cat-c/c2/1556/>  
英語 <https://ecr.research.kyoto-u.ac.jp/en/cat-c/c2/1556/>
- (3) 人文科学研究所 石井美保 准教授  
日本語 <https://ecr.research.kyoto-u.ac.jp/cat-c/c2/1622/>  
英語 <https://ecr.research.kyoto-u.ac.jp/en/cat-c/c2/1622/>
- (4) 経営管理大学院 Spring H. Han 教授  
日本語 <https://ecr.research.kyoto-u.ac.jp/cat-c/c2/1586/>  
英語 <https://ecr.research.kyoto-u.ac.jp/en/cat-c/c2/1586/>

10

## 社会課題解決に向けた人文・社会科学系研究リソースの可視化

「提案する人文・社会科学」というのを 2 年前のセッションで掲げさせていただきました。京都大学の指定国立大学事業で 3 月まで実施されていた人社未来形発信ユニットでは、人文・社会科学から社会に向けて、「人社系研究はこういうことをしている」と提案していきましようということで、

そのキャッチコピー的にこの「提案する人文・社会科学」を掲げていました。「既に人社系研究は社会課題解決に向けたテーマに取り組んでいるということの可視化」に関して、これからお話しさせていただきます。

人社系研究からのアクション

社会課題解決に向けた人文・社系科学研究リソースの可視化 3

- ・既に人社系研究は社会課題解決に向けたテーマに取り組んでいるということの可視化

## 提案する人文・社会科学

©京都大学人社未来形発信ユニット

それが、人社系総合ハブサイト Rethinking the future 「未来を再考する人社系」というサイト (<https://jinsha.ifohs.kyoto-u.ac.jp>) で、「総合知」勉強会でも簡単にご紹介させていただきました。人文・社会科学系分野を中心とした社会連携、産官学連携、異分野共同研究、そして社会課題解決に向けた研究の推進を目的として作成したものです。

簡単に性格を述べると、「ポストコロナ」や「ウェルビーイング」といった、これからの未来を考えていくために重要なキーワードを切り口に、京都大学の人社系研究リソースを探索できるサイトになっています。皆さんに気軽にインタビューや講義動画に触れていただければとサイト紹介にも書いています。

本サイトは、先ほど述べた人社未来形発信ユニットが主体となり、KURA が委託を受けて作成しました。そして、4月からは新しくできた組織である人と社会の未来研究院に引き継いでいます。

京都大学「人と社会の未来研究院」では、**人文・社会科学分野を中心とした社会連携、産官学連携、異分野共同研究、そして社会課題解決に向けた研究の推進を目的**とした、人社系総合ハブサイト「**Rethinking the future「未来を再考する人社系」**」を公開しました。

このウェブサイトは、「ポストコロナ」「ウェルビーイング」など、**これからの未来を考えていくための重要キーワードを切り口に、京都大学の研究リソースを探索**できるようになっています。気軽にアクセスできるインタビュー記事や講義動画から最新の研究成果まで、今日の課題の解決につながる人社系研究の知見をぜひここから見つけてください。

<https://jinsha.ifohs.kyoto-u.ac.jp>

# Rethinking the future

未来を再考する人社系

社会から人文・社会科学知へ、人文・社会科学知から未来へ

多様化・複雑化が進む社会は、迅速な意思決定と柔軟な対応が求められる。従来の研究手法だけでは、新たな課題に柔軟に対応するには、従来の研究手法だけでは、社会の発展、研究者の成長を促進しなければなりません。

Rethinking - 今までの課題を問い直し、新たな視点を創出する。本サイトでは最新の研究成果を公開して、社会的課題を再考するヒントになる。京都大学の人文・社会科学知をキーワードに紹介しています。これは、よりよい未来をともに考える入口です。

コンセプト作成に当たって、人社未来形発信ユニットの先生と、KURAの私と広報担当のURA、あと、「ほとんど0円大学」という業者さんの3者でかなり話し合い、詰めるのに結構時間がかかりました。コンセプトが固まってからは割と早かったです。こちらも先ほどご紹介しましたOA化事業と同じで、指定国立大学関連の財源になります。KURAが委託を請け負ったので、作成体制としては、人社系プログラムメンバーが手分けしてコンテンツを収集し、解説文も作成しました。

## 取り組み体制

### 取組体制

京都大学が指定国立大学構想の下に立ち上げた**人社未来形発信ユニット**が作成主体  
(2022年3月末終了)  
**学術研究支援室 (KURA)** がユニットの委託を受けて作成  
(2020年度～2021年度)  
**一人と社会の未来研究院**が引き継ぎ運営  
(2022年4月より)

具体的に作成する段階では**3者**でコンセプトを検討  
**人社未来形発信ユニット** (出口教授、大西特定准教授)  
+  
**学術研究支援室 (KURA)** (人社系・稲石、広報・鮎川)  
+  
**ほとんど0円大学** (花岡氏ほか)

### 活動費の財源

指定国立大学法人  
国立大学改革強化推進補助金  
(国立大学経営改革促進事業)  
**人文・社会科学の未来形の発信**

### 作成体制

コンテンツ収集と解説文の作成は  
**学術研究支援室 (KURA)**  
**人社系プログラムメンバーURA**  
(稲石、藤川、藤田、天野、佐々木 (小泉、鈴木))

ウェブサイト作成の目的は、京大人社系研究者とターゲットとの共同研究・連携を増やすことです。企業・産業界、理系研究者、中央省庁・行政関係者が、このウェブサイトのターゲットとなります。共同研究・連携を増やすことを目的に、プロアクティブに社会へ連携を訴えることのできるサイトとして、人社系研究の意義や社会的役割の理解を訴えていくというのが、あまり表には出てはいませんが目的としてありました。

作成の目的とターゲット
社会課題解決に向けた人文・社会科学系研究リソースの可視化 3

**Webサイト作成の目的**  
京大人社研究者とターゲットとの共同研究・連携を増やす

**Webサイトのターゲット**

- ① 企業・産業界
- ② 理系研究者
- ③ 中央省庁・行政関係者

**Webサイトの役割・目標**  
プロアクティブに社会へ連携を訴えることのできるサイト

人社系の知の共同研究を推進するために、広く社会に対して

**人文・社会科学の意義や社会的役割への理解を訴えていく**

そのために

- ・ 人社系の研究成果を発信
- ・ 異分野との共同研究や社会との連携、社会への研究成果の活用・展開事例を紹介

→ **サイトを見てもらいターゲットからコンタクトしてもら**

**CONTACT US**

京都大学の人文・社会科学では、社会連携・異分野との共同研究を推進しています。

> お問い合わせはこちら

というのも、一時期人社系不要論みたいなことが言われていて、人社系は役に立っていないみたいなことがすごくプレッシャーとしてかかっていたので、「いや、そんなことはないんだ」と。人社系研究がこれだけ社会に対していろいろな役割を果たしていることを見てもらいたいという思いも実は奥底にあります。産学連携事業を発生させることには至らなくても、サイトを見てターゲットからコンタクトをしてもらうところを、着地点に定めております。

簡単にこのウェブサイトのコンセプトを説明すると、「キーワードに沿って既存の情報をリンクさせたハブサイト」です。それから、もう既にある情報を別の切り口、特に京大人社系研究リソースの産連・学際・社会課題視点での再構築で、大学視点ではなく、外からの目線で整理するとどうなるか

を考えてつくりました。大学に長くいると、どうしても大学視点での発信になりがちですが、多分外から見たらあまり分からないところがあるので、「外から見たらどう見えるか」を常に意識しながら、コンセプトを考えました。大学視点でカテゴライズせずに、ステークホルダーから見たらどうかという視点で構成を考えています。

### キーワードに沿って既存の情報をリンクさせたハブサイト

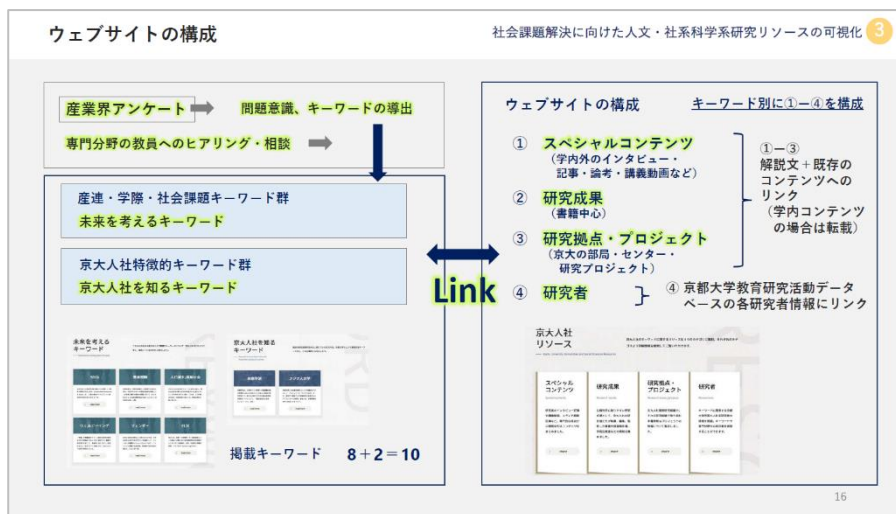
#### 京大人社系研究リソースの産連・学際・社会課題視点での再構築

大学視点でカテゴライズされてきた京大人社の情報を、  
産業界や理系研究者、行政が興味をもつカテゴリ、及び  
京大人社の独自性が伝わるカテゴリで、  
それぞれ整理し直して表現する  
(それぞれのカテゴリでソートして関連情報のみ集約して見せる)

ウェブサイトの構成は、10 個のキーワードを①スペシャルコンテンツ、②研究成果、③研究拠点・プロジェクト、④研究者という 4 つのカテゴリに分けてリンクさせる方式をとっています。

- ① スペシャルコンテンツというのは、学内外のインタビューや、先生方の記事、論考、講義動画といったものになります。
- ② 研究成果に関しては、先ほど新刊情報ポータルサイトをご紹介しましたが、論文ではなく書籍中心に、一般の人が読みやすい、入手しやすい書籍に限っています。
- ③ 研究拠点・プロジェクトというのは、京大で、例えば ELSI をテーマにするさまざまな組織—研究プロジェクト、センター、部局—があります。規模感や粒度のばらつきはありますが、ELSI というテーマでどういう組織があるかを横串的にリストアップして、リンクさせる形にしています。

- ④ 一番重要なのは研究者です。そのテーマに関連したどういう研究者がいるか、京都大学の教育研究活動データベースにリンクさせています。



作成に向けた調査として、産業界のニーズ調査を実施しました。京都大学には「<sup>かなえかい</sup>鼎会」という京大 OBOG の企業トップ層の会員組織があって、渉外課を通じてそこにアンケートをとらせていただきました。人社系研究に何を求めているかや、キーワード的なこともお聞きし、そこからピックアップして検討して出てきたのが、ここにある 10 個のキーワードとなります。未来を考えるキーワード群 (8 個) と、京大人社を知るキーワード群 (2 個) という 2 つに分かれています。

「未来を考えるキーワード群」は、産業界アンケートや先生方へのヒアリングから出てきたことで、「これからの未来にどういった課題が想定されるか、解決していかなければいけないか」に関連した、ポストコロナ、AI、ウェルビーイング、ELSI、SDGs、人口減少/高齢社会、環境問題、ジェンダーを、初動時にはピックアップしました。

加えて「京大人社を知るキーワード群」として、京都大学の人社系研究の特長とされているようなもの（京都学派、アジア人文学）を併せてピックアップしています。これについては、京大人社系研究の、特にこのキーワードの専門の先生方からもいろいろアドバイスをいただいたり、お話をお伺いしたりしています。

**作成に向けた調査**

社会課題解決に向けた人文・社系科学研究リソースの可視化 3

**産業界のニーズ調査**

サイト作成に向けたサイトの機能やコンテンツの検討にあたり、**産業界や社会のニーズを把握するためのアンケート調査の必要性**

京大OBOGの企業のトップ層で形成された**鼎会会員にアンケートを実施**  
\*2020年9月に開催された鼎会総会時の対談企画にも結果を活用

**京大人社系教員へのヒアリング**

サイトのあり方や構成、キーワードの設定など、**専門的な見地からのアドバイスも含めてご意見を募る**

選択したキーワードに関する解説テキスト「**京大人社の知見**」に関してお問い合わせ

**初動時キーワード**

8 + 2 = 10

- ・ キーワード毎に担当を決めてコンテンツを収集
- ・ 全てのコンテンツに解説文を作成

**未来を考えるキーワード群**

- ・ ポストコロナ
- ・ AI/シンギュラリティ
- ・ ウェルビーイング
- ・ ELSI
- ・ SDGs
- ・ 人口減少/高齢社会
- ・ 環境問題
- ・ ジェンダー

**京大人社を知るキーワード群**

- ・ 京都学派
- ・ アジア人文学

17

訴えたいことは、やはり人社系には、社会課題解決に向けて、既にこれだけ研究・活動があることを可視化・発信したいということが1つ。加えて、既にあるコンテンツ・価値を、特定の切り口で再構築して新たに見（魅）せる。何か新しくつくったものではなくて、あくまで既にあるものを「ここまでこういうことをしてきた」と利用しています。

作成の構想を始めたのが2年半ぐらい前なので、そのときは「総合知」ということはまだ言われていませんでしたが、結果として、求められているものが「総合知」につながるようなものであったと。「総合知」の創出に向けて、このサイトも有益な部分が出てくるのではないかと考えています。



人社系研究には社会課題解決に向けて、既にこれだけの  
研究・活動があることの可視化・発信

既にあるコンテンツ・価値を特定の切り口で再構築し見（魅）せる

「総合知」という言葉が出てくる前に作成を始めたウェブサイトだが、  
「総合知」の創出に向けて有用と思われるコンセプト

「総合知」の創出に向けた共同研究・協働を誘発

必ずしも即戦力となる実践研究は期待しない（とくに京大には）。むしろ、地球・人類の  
発展や進化の基層を成してきた哲学・思想・歴史の深掘り・総括を期待したい。超長期視点  
からの経営ビジョン構築には、それが必須と考える。（鼎会アンケートより抜粋）

18

人社系の研究が何の役に立つかということがいろいろ議論されてきましたが、先ほど述べました産業界アンケートの中で、よいお話を書いてくださる方がいたので、少し紹介させていただきます。「必ずしも即戦力となる実践研究は期待してない（とくに京大には）。むしろ、地球・人類の発展や進化の基層を成してきた哲学・思想・歴史の深掘り・総括を期待したい。超長期視点からの経営ビジョン構築には、それが必要と考える。」ということで、目先の課題だけではなく、もっと長期スパンの哲学的なこと・歴史的なことを求められている面もあると分かりました。

そういった京大人社系の研究の深みなどを表すために、このサイトにある「京大人社の視点」で各キーワードに解説文を付けています。この解説文は結構力を入れた部分で、こういったところからも人社系の「知」の深み・厚みを感じていただければと思っています。このサイトは学術知を社会へ発信・還元していく性格を持っているのではないかと考えています。

京大人社の視点

未来を考えるキーワード

AI/シンギュラリティ

京大人社の視点

シンギュラリティの到来... 有人人工知能による超知能による社会への影響が懸念されています。AI/シンギュラリティの到来は、社会に大きな影響を及ぼすと考えられています。AI/シンギュラリティの到来は、社会に大きな影響を及ぼすと考えられています。AI/シンギュラリティの到来は、社会に大きな影響を及ぼすと考えられています。

未来を考えるキーワード

ポストコロナ

京大人社の視点

コロナ禍を経て、社会が大きく変わっていく可能性が指摘されています。これは、未来の社会に大きな影響を及ぼすと考えられています。コロナ禍を経て、社会が大きく変わっていく可能性が指摘されています。これは、未来の社会に大きな影響を及ぼすと考えられています。

未来を考えるキーワード

ジェンダー

京大人社の視点

性別平等の推進として掲げられる社会、未来の社会のあり方をデザインするとして、ジェンダーの重要性が叫ばれています。ジェンダーの重要性が叫ばれています。ジェンダーの重要性が叫ばれています。ジェンダーの重要性が叫ばれています。

京大人社系研究の知の厚みと深みを感じられるサイトに  
学術知を社会へ発信・還元

最後に、先ほど OA 化事業について述べましたが、成果を OA 化した先生方の中には、いわゆる社会的インパクトのある研究をされている先生がいらっしゃいます。書籍を OA 化することによって、社会的インパクトのある研究を幅広い方々に読んでいただくことができました。1つの例が、教育学研究科のエマニュエル・マナロ先生です。先生の書籍を、教育学研究者ではなくて、実際の教育現場の学校の先生などが読んで、教育現場に生かしてくださったというインパクトが生まれた例があります。もう1名、経営管理大学院のスプリング・ハン先生の例では、COVID-19への対応に関する書籍を出版と同時に OA 化したので、まさにタイミングが合う形で成果が世に出されました。

スプリング・ハン先生が、インタビューで「研究者は引用数を上げるために研究しているのではない。社会に役立ちたいという思いがある。」とおっしゃっていて、すごくはっとしました。やはり社会課題解決に向けて意欲的な先生がいらっしゃるの、そういった先生方のご研究をいかに社会実装に向けてつなげて行くかが、URAの役割として求められているのではないかと思います。「総合知」と人社系研究の可視化という点では、こういっ

たオープンアクセスと、そして社会的インパクトについても、広く語れる部分ではないかと考えております。

総合知とオープンサイエンス、そして社会的インパクト

社会課題解決に向けた人文・社会科学系研究リソースの可視化 3

海外出版書籍オープンアクセス化 インタビューシリーズ (1)

海外出版書籍オープンアクセス化 インタビューシリーズ (2)

人系海外出版書籍のオープンアクセス (OA) 化事業より

社会的インパクト 引用ではなく社会的貢献

- ・ 教師により実際に教育現場で使用される
- ・ COVID-19への素早い反応
- ・ 研究者は引用数を上げるために研究しているのではないというご発言

20

## リエゾンとしての「総合知」 人文学をハブとした応用連携の可能性

東京大学大学院人文社会系研究科/  
東京大学連携研究機構ヒューマニティーズセンター 齋藤 希史

川人さんや稲石さんからのお話がありましたので、私が今からお話しすることは、全て語られていると言ってよいのかもしれませんが。ただ、このセッションを組むにあたって、いろいろお話をさせていただく機会があり、その中で研究者と URA という形の区分というのは、あまり意味がないのだなということですか、これからどういう研究を組み立てていくべきかという全体のデザインに関心がある研究者は、現場の URA の方々と実は考えていることは一緒で、それをいかに実現していくかが大事ではないかななどとも感じました。それは、私が今、責任者を務めております東京大学ヒューマニティーズセンターという連携研究機構があるのですが、その経験ともかかわりますので、そのあたりもからめて少しお話をさせていただければと思います。

RA協議会第8回年次大会

[F-3]最近よく聞く「総合知」って何？—人文・社会科学の視点から—

### リエゾンとしての「総合知」 人文学をハブとした応用連携の可能性

齋藤希史 SAITO Mareshi  
東京大学大学院人文社会系研究科  
東京大学連携研究機構ヒューマニティーズセンター

タイトルとして、「リエゾンとしての『総合知』」としました。このリエゾンという言葉は、「つなぐ」ということを少しキャッチーな言い方で示したもので、さまざまな研究分野を「つなぐ」、社会と大学とを「つなぐ」という意味をこめています。この「リエゾン」が私どものセンターの中では1つのプロジェクトの名前になっています。

プロジェクトは、博士号取得前後の助教や特任研究員5、6人のメンバーを中心に、センターのさまざまな研究プロジェクトをサポートしたり、新たなプロジェクトを企画したりなど、センターのいわばエンジンとなっています。同時に、メンバーはURA—東京大学では、URAを学内の資格として取得するシステムがありますが—そのURAとしての資格も取得することを1つの目標として位置付けています。

現在までに、このセンターで活動していた学術支援職員と助教1名ずつ計2名がURAの資格を取得して、1名は他の機関にURAとして就職し、もう1名は、今そういった資格も利用して就職活動をしている状況です。ということで、言わばキャリアとしての研究者とURAをつなぐ役割としての「リエゾン」という位置づけもあると考えています。

それからもう1つ、「リエゾン」は人文学—（人文社会科学と言っても同じですが）—の新しい役割なのではないかということ、このセンターを設立してから5年になりますが、その活動を通じて考えてきました。それも込めて、いろいろワードが散りばめられていますが、こういうタイトルでお話をさせていただこうということです。

## 人文学の背景

いきなりこういうスライドになりますと、いかにも苔の生えた人文学研究者という印象を抱かれるかもしれません。私はもともと中国文学、古典文学をやっていますので、普段は3世紀から5世紀ぐらいの文献を読むことが多く、どうしてもこういう書き方になってしまうのですが、申し上げ

たいのは、例えば「総合知」と言っても、あるいは学際研究と言っても、ワードとしてはとても新しいということ。対して、学術の歴史はもっと長い。その中で培われてきた「知」というものが確実にあって、それを確認した上で、どうすくい上げて現代に位置付けるかというのが、当然必要なことで、それが今、「総合知」という形で示されているのだらうと思います。

## 人文学の背景

- 神から人へ：humanitas, humanities
- 世界は文である：天文・地文・人文
- 近代人文学：哲・史・文
- 科学として：les sciences humaines et sociales
- 専門知へ：分野としての人文社会科学（人文学・社会科学）

2/6

人文学の背景として幾つか、「神から人へ」、あるいは「天文・地文・人文」、それから「近代の人文学」、「科学として」ですとか、「専門知へ」ということをここに並べておりますが、大雑把にいうと、もともと人文学というのは総合的な「知」の営みであったということです。ここに書いたことも、実はヒューマニティーズセンターに集っている研究者の先生方に「一体ヒューマニティーズって何なんでしょうね」というようなインタビューをする中で、こういったワードが出てきたわけです。

例えば、「天文・地文・人文」なんていうのはすごく古い言葉のようなどころがあり—実際にそうなのですが—これを現代的な感覚でいうと、「天文」というのは宇宙の原理、世界の原理というか、この宇宙そのものが成り立

っている原理のことを考えると。「地文」というのは、地球レベルで私たちや自然も含めて、この地球というプラネットのことを考えていく。人新世なんて言い方もありますけれども、そういったものを考えていく。「人文」というのはまさに、人間社会のことを考えていく。という意味では、決して古くさくはない。新しいというか、現代的な考えということもできます。

というように、「総合知」と言われているものを、伝統的な人文学というものをもともと含み込んでいるのだという考え方を、まず研究者の側が発見していくということが大事なのではないかと思うんですね。

と言いますのも、何か政策的なワードが出てくると、それに拒否反応を示してしまうという習性がやはり研究者の方にあるように思われます。それは大変損なことで、自分たちの研究そのものの価値を高めることにならない。むしろ、自分たちの研究の背景というものをきちんと押さえておいて、その中でもう1回、現在の政策課題として示されたワードを位置付け直すということが重要ではないかと私自身は考えていますし、そういう考えを持っている人社系の研究者は実はかなり多いのではないかと感じています。

問題は、研究というものがどうしても専門知、専門分野の知を深める方向に行って、そうすると当然ディシプリンがだんだん狭くなっていく。そしてその中で評価というものが基本になっていく。そこでやはり、総合的な観点というものが、つまり元はあったはずの基本的な観点や視野が失われていったということなのではないか、それをいま外側からも要請されているのではないかというふうに思います。

## 現代の人文学

ですので、現代における人文学というものを、その意味ではもう一度役割を見直さなければならない、あるいは役割を見直すことができると、私

自身は考えています。

## 現代の人文学

- 新たな役割
- 諸学再連携のハブとして：大学という場の再生
- 人格修養から価値創造へ：社会における応用
- public humanities と社会課題
- ヒューマニティーズとしての「総合知」

3/6

この大学という場所、あるいは大学に限らず、研究を活動の中心とする機関というものが、そもそもどういう場所であったのかを考えること。諸学再連携のハブとしての再定義をすることが、やはり「総合知」を考える上で重要であると思います。このワードが何年持つかというのは分かりません。もしかしたら別の言葉に書き換えられてしまうのかもしれませんが、ただ、その考え方そのものはたいへん大事なのではないかなと思います。むしろ人文学研究者から見ると、ようやくここに来たかという感じも、自分たちの責任を棚に上げてですが、いたします。文理融合ではなく、学際でもなく、総合的に考える。これはやはり制度というよりも視点の問題で、それが大事だと思うわけです。個別の分野は維持された上で、そうした視点をもつ。

先ほど、社会課題ということについて稲石さんがおっしゃられていましたが、この社会課題についても、個別社会課題に個別対応するだけではなくて、個別の社会課題そのものを総合的に捉えるという、つまり、社会課題そのものも実は連動しているわけですね。1つ1つの社会課題が個別に存在しているわけでは当然ないわけです。そこをつなげて見ていくという



ことを、やはり考えなければいけないということも含めて、連携、学を結び合わせていくということがやはり重要で、それができなければ、人文学、ひいては大学の意味は多分ないだろうと。大学が存在する意味というのは、そういうところにしかないだろうと、私自身は感じているわけです。

少し言い換えると、以前は学問というのは、人格修養的な部分が強かったんですね。人文学はその系譜にあります。すでにそういうものではない。一方で、現代における学術、特に人文学というのは、ある種の価値創造、自分たちの社会をどういうふうにつくっていくかを示すことが重要で、それができなければ、少なくともその考える材料を提供することができなければ、現代社会における存在意義はないのではないか、と考えます。

それは、別の言葉で言えば、社会における学術の応用や実践ということなのだろうと思いますが、これは社会とともに考えるという意味での応用だと捉えたいと思っています。つまり、何らかの価値を学問の側がつくって、それを社会に当てはめてということではなくて、社会の中で活動する中で価値をつくっていくという、そういうプロセスが重要になってくるだろうということなんです。

その意味で、北米圏では今、パブリックヒューマニティーズという考え方がいろいろな所で言われているように思われます。これは、ヒューマニティーズそのものが、いわゆる人文学そのものが、そもそも本質的にパブリックなものであろうと、そういうところから始まっているはずだという、先ほどの古典的な話とも結び合わせて、そこから社会における人文学をどういうふう実践していくのかということになっていくわけです。

それをひっくるめて、スライドにはヒューマニティーズとしての「総合知」と言っていますが、これは別に人文学を特権化するというのではなくて、人文・社会科学全般、人間や社会を対象とする学術全体ということになるのではないかと思います。

### サポートとリエゾン

- 成果の還元からメイキングの共有へ
- つながることを最優先に
- “人文社会科学型URA”の技法・思考の確立
- “総合する知”として

4/6

具体的にどういうふうにしていくのかについては、私どもが活動しているヒューマンティーズセンターで何をやっているのかご紹介しながらお話しするのがよいかと思います。

1つは、学術の共有です。学術の成果を還元する、社会に貢献するというのではなくて、そもそもどういう学問をやっているかというそのメイキングの部分、視点を共有していく。そして、まず「つながる」ということを最優先に。これは先ほどの稲石さんのお話にあった、連携は手段であって目的ではない、まさにそのとおりなんです。「つながる」ことを最優先にというのも、「つながる」ことが目的ではないです。手段です。

ただし、研究では、踏まなければいけない手順、マストの手順というのは幾つもありますよね。例えば、事実に基づかなければいけない。これは外せないです。事実に基づくということは、目的ではありません。手段です。しかしそれは外せない。同じように、「つながる」ということも、やはり手段ではあるが外せない。少なくとも常に視野に入れておくべきです。もちろん、それは目的があった上で、その手段として、これはきちんと押さえておかなければいけないという、そういう考え方ですね。これまでは、たとえば

事実に基づくことがとりあえずマストだったわけですが、連携もそのマストの中に入れていこうと考えています。

そうした意味での、特に人文・社会科学系というのは、その「つながる」ための技法、スキルの確立、共有が求められているだろうと。それを促すというのが川人さんのお話の中にもありました。それを促していくのは、“人文・社会科学型 URA”—クォーターションを付けているのは、こういう言い方がいいかどうか、ということでもあるんですが—そういう新しいタイプというか、既に存在しているけれども、先ほどの稲石さんのお話にもあった可視化をされていないのかもしれないと思うのですが、そういったタイプの URA の活動をきちんと位置付けていく。

その技法やアイデア、これはもうソースは既に存在していることがお2人のお話からもよく分かりますので、それをきちんと示して行って、これが1つの URA の役割というか機能として重要だと。それが今の「総合知」というものと深く関わっていることを示していくことが重要ではないかと考えているわけです。

“総合する知”、「総合知」とは何かという定義ですが、“総合された”知ではなくて、“総合していく”んですね。ダイナミックなものです。それは総合された何か固まった「知」があるわけではないです。先ほどの社会課題そのものもやはり総合していくわけですね。個別社会課題に個別対応じゃなくて、という。そういう考え方にしていくなさるべきではなかろうかと思えます。

## ヒューマニティーズセンターの実践

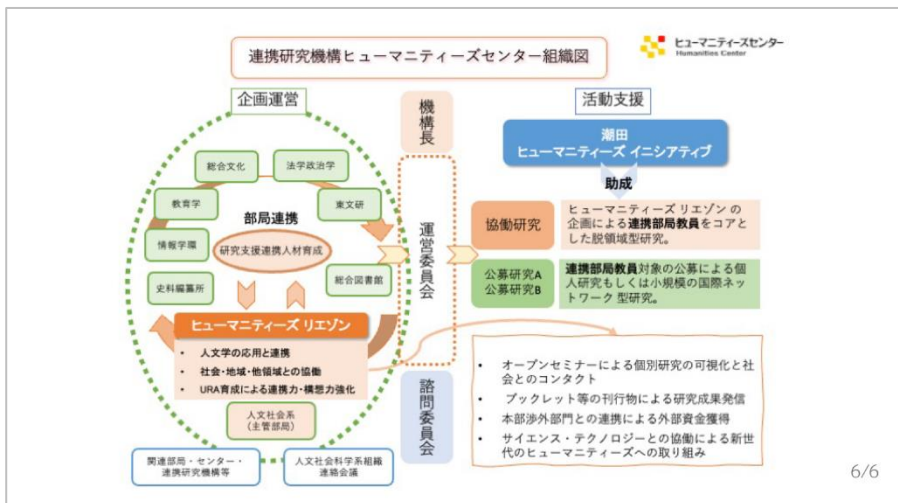
ヒューマニティーズセンターでは、例えばオープンセミナーというセミナーを、ほぼ毎週・多い時は週に複数回開催しています。その仕組みは、割と単純です。企画運営の中心になっているのが、「ヒューマニティーズリエゾン」という先ほど申し上げた助教や特任研究員を中心とした企画のプロジェクトです。組織としては連携研究機構という形式をとって、主に人文

学に関わる部局が連携部局として運営委員会を構成しています。

## ヒューマニティーズセンターの実践

- 研究助成による個人研究の可視化
  - リエゾンによる協働研究の提案
  - コンタクトゾーンとしてのオープンセミナー
  - オンラインセミナー運営、刊行物・動画編集等のスキル修得
  - 専門知と総合知の柔軟な共存と評価の確立
- <http://hmc.u-tokyo.ac.jp>

5/6



6/6

資金的な部分では、大学からの経費配分の他、個人寄附による大口のファンドを1つ得て、主に研究助成に振り向けています。助成のあり方には協働研究と公募研究などがありますが、1つの試みとして、個人研究というもの多くの研究者に行き渡るように公募型にして一科研費と同じで基盤(C)ぐらいの感じですー比較的簡単なA4 1枚両面くらいの書類とインタビ

ューで、助成をしていくということをしています。

そうすると意外に一というのも変ですが、最近は文系でも研究費に不足を感じるということもあって、応募があります。応募してくださる先生は、別に最初から社会貢献とか、社会との連携とか考えているわけではありません。そういうことで応募しているのではなく、なるべく書類の手間のかからない助成を受けて自分の研究をしたいと。こちらとしては、一般公開のオープンセミナーを期間中に年に2回していただくことをオブリゲーションにしています。一般公開されているわけですから、学内外の人が聞きにきます。最近はオンラインですが、参加者は増えて、200名を超えたりします。そうすると、否が応でもそういうところで自分の研究を紹介していく、話していくという機会を持つことになります。それが、私自身も予想外だったのですけれども、かなり研究者を変えていくんですね。

例えば科研費では、そういう機会は基本的にオブリゲーションとしてはありませんよね。自分の論文を積み上げて評価されていくことにむしろ方向付けていく。ヒューマニティーズセンターとしてはそれは求めていません。研究者個人の領域です。むしろ、オープンな場所で、自分の研究を語る、これをオブリゲーションにしている。そうすると、「意外にこれは面白い」とか一川人さんのお話に、素人質問を恐れない、それでハードルを下げてくというお話が確かあったと思いますが一素人質問がどんどん出るわけですね。聞いているのが素人さん方ですから。でも、その素人質問から得る「あ、なるほど」という観点を、研究者っていうのは実は喜ぶんですね。

ですので、いわばコンタクトゾーンというものをつくっている。それによって研究者の意識も変えていく。しかも、少額の研究費の助成ですから、比較的若い研究者の方が多いんですね。そうすると若い段階から一キャリアの浅い段階からと言ってもいいんですが一そういう経験を重ねていくとここで、社会との関わり方というものを、それぞれの研究者の考えとか研究の中からつくっていく、生み出していくことが可能になっていく。こうい

うようなことを、実はやりながら見つけたというところがあります。

仕掛けとしては簡単で、まず助成をする、研究をしてもらう。けれど、社会とのコンタクトをとってくださいねという形にすると。じゃあやりましょうかとなり、意外に面白いですねということになる。それが積み重なっていくと、企画運営をしている側のスタッフにとっては、いろんな研究者、いろんな研究と接し、それといろんな社会との関わり方を見て、それをどういうふうにやったらうまくいくのかという経験を積んで、それがスキルになっていく。大学全体へ広げてしまうと、ちょっとつかみどころがないですが、ヒューマニティーズセンターに応募してきている研究者という集団で見ると、10、20 というレベルですから、リソースがある程度限られていて、やりやすいというところがあるかもしれません。そういうことで、オンラインセミナーの運営、刊行物・動画編集などアウトプットのスキルが得られると考えています。

最終的にはやはり、そうはいつでも現段階では、「専門知」というものについては評価が確立していると思いますが、「総合知」というものに対する評価は確立していない。評価とキャリア形成は連動しますので、ここは大事です。それから、「専門知か総合知か」みたいな考え方になりがちです。でも、キャリアの途中で「専門知」に専念する期間があってもいいし、「総合知」に専念する期間があってもいい。

先ほど、助教の方が URA の資格を取ってというお話をしましたが、研究者か URA かっていうキャリアを二分していくというような考え方も、やはり改めないといけないということとも、これはかかわると思います。柔軟なキャリアのあり方や評価の確立というのは、これから課題かなと考えているところです。私の話は以上ということにさせていただきます。ありがとうございました。

**新澤** ここから総合質疑、ディスカッションの時間に入ります。限られた時間で議論を進める観点から、登壇者に共通質問を準備しております。既に皆さんのお話の中で答えをいただいているような気もしますが、改めて3人の方に2つの共通質問を投げかけたいと思います。

「総合知」の推進に向けて、あるいは「総合知」を推進すると、

- ① 研究者のマインドは変わるでしょうか。変わるべきでしょうか。
- ② URAのマインドは変わるでしょうか。変わるべきでしょうか。

**新澤** まず、川人さんいかがでしょうか。

**川人** 何らかに変えていくのがよいし、変わっていくところもあるのだろうと思っています。本日稲石さんと齋藤先生のお話を聞いて、また5月の勉強会で紹介してもらった事例をもう1回見直して改めて感じたのは、「何か全く新しいことをやらなければいけないというわけでもないな」ということです。少し見方が変わると、「総合知」的な取り組みを面白いと思えるのではないのでしょうか。また、他の人にも自身の取り組みの価値を分かってもらえるのはすごく大事ですので、そうした意識が今までと違うアウトプットにつながる可能性もあると思います。

何かしらの成果や変化が生まれたり、社会課題を解決することはすごく大変なことです。そこに至るプロセスにおいて、少し見方や考え方を変えたり、違う視点で見直すというだけでも、実は大きな変化につながる小さな一歩になるのではないかと、今日の議論を伺っていて思いました。

**新澤** ありがとうございます。

続いて、稲石さんのご意見を伺えればと思います。

**稲石** 私は、変わるべきだから「総合知」ということが言われているのではないかなと思っています。「総合知」って言われたから変わらましようということではなく、変わることが求められているから「総合知」が言われだしたような気がするんです。

今、川人さんがおっしゃったように、一からやるものではなくて、私のほうでもご紹介させていただきましたが、もう既に、いろんなところでいろんな研究者の方がやられているので、「見方を変えて」と川人さんおっしゃった点、URAとしては「見せ方」を変えていくということができるのではないのでしょうか。ゼロからではなく今まであるものを再構築する、価値を新しくつくり出す・見出すようなことを、どうサポートしていくかが、URAには求められているのかと思います。その上で人と人をつなげていく、プラットフォームをつくるといった、もっと有機的なことができる活動に向かって行けるのかなと思っています。

**新澤** ありがとうございます。

先ほどのご発表と絡めると、人社系では既にやっていますという発信からさらに一步踏み込んで、「いや、でもなかなか巻き込まれてくれないんです、人社系研究者は」というときに、URAとしてのマインドセットなり、研究者としてのマインドセット、稲石さんご自身の活動が変わっていくかという点はいかがですか。

**稲石** そうですね。研究者の方でも、もう既にとても意欲的な先生と、そうでない先生といらっしゃると思うんですね。だから、2つのアプローチが必要。意欲的な先生にはもっと重点的に支援や伴走をする、人をつなげたり、社会実装に向けてノウハウをいろいろ—まだそこまでノウハウはないですが一つつけていくようなことをして推進していったほうがいい。一方で、「総合知って何」といった先生もいらっしゃるの、そういった先生には「総合知とは何」かといったところをお伝えするところから始めて、興味がおありのようだったら、もう少し活動的なほうに引っ張っていくといっ



たアプローチができると思います。それらを同じレベルで語ってしまうと、分からなくなってしまうところがあるので、2つのタイプに分けて考えていくのがいいのではないかと考えています。

**新澤** ありがとうございます。

では、次に齋藤先生に、研究者自身が発見するのであるというお話や、研究者と URA の区分自体があまり意味のないものになっていくかもしれないというお話もあったので、研究者あるいは URA、マインドセット、変わるでしょうか、変わるべきでしょうか。齋藤先生、いかがでしょうか。

**齋藤** そうですね。私自身は、もう既に変わっている、あるいは変わるべきだと考えているのですが、今の稲石さんのお話にもあったように、何とか、研究には、むしろ社会と距離をとることで深められるという側面はあることはあるだろうと思います。なので、やはり“フロア”が違う。そのフロア間の行き来を密にするというか、システム化する。売り場が違うと言ってもいいんですけども。

「専門知」のフロアというのはやはりあるわけですよね。もう1つ、今言われている、ここで言う「総合知」のフロアというのも当然あるという。そのそれぞれのフロアをきちんと用意して、その中の行き来をどれだけ密にするか。そこを行き来できるマインドですね。研究者にとっては特に、「総合知」をやり始めたからもう他は知りません、というのでは多分うまくいなくて、行き来できるマインドが、私は重要ではないかと思っています。

同時に URA も、自分たちは要するにサポート人材であるということではなくて、「サポートからリエゾンへ」とお話ししましたが、そういうつなぐ人材である以上は、その「専門知」のフロアでも一定の働きを成すことができるということが、今後はむしろ求められていくのではないかなと考えています。

**新澤** ありがとうございます。

頭の中に建物をイメージして、「総合知」のフロアと「専門知」のフロアがあって、いろんな行き来の仕方があってというのは、非常に心がわくわくしました。

**新澤** オンラインで質問/コメントを頂いているので、ご紹介します。

「6年前から URA 兼社会学研究者として、地域課題 PBL やベンチャー関係に携わっています。地域の方が事例が多いかもしれませんね」というコメントです。URA 兼社会学系研究者ということで、齋藤先生のヒューマニティーズセンターの取り組みと少し似ているなど感じました。このあたり、特に URA と研究者の行き来と「総合知」といった形で、齋藤先生からコメントを頂ければと思いますが、いかがでしょうか。

**齋藤** これは、例えば今、私が所属している東京大学人文社会系研究科では、地域連携を和歌山の新宮市などと幾つかしています。ある特定の地域とのつながりの中で、事業を推進していくのですが、その場に行くと、研究者も当然 URA 的な働き、その地域とのつながりということを中心に話をする、活動するということになっていく。

今の Q&A のコメントの中の「地域」がキーワードになってくるんじゃないかなと思います。つまり、地域という場所の具体性、何となく社会ということではなくて、何々市の何々町をどうしていくのかということに向き合うところで、研究者と URA という区分は、むしろ消えていくのかなと考えてはいます。

**新澤** ありがとうございます。

川人さんのお話の中に、「総合知」を考えるということが、URA の活動をバージョンアップすることにつながるのではないかというのがありましたが、川人さんにも、URA のマインドセット、変わるでしょうか、変わるべきでしょうかというところ、伺えればと思います。

**川人** ありがとうございます。そうですね。URA も今、認定制度ができてきて、日本において1つの職業として確立している段階だとは思いますが、齋藤先生がおっしゃっていたような、研究者とURAを二分するのはよくない、二分すべきではないというご意見は、私も非常に共感を覚えます。

私自身は、URAになってから丸10年ぐらい経つのですが、最近、URAは「職名」とすると同時に「機能」とあるというのを強く感じるがあります。URAという職名でなくても、URA的な活動をされている方々はたくさんいらっしゃいますし、そうした方の中に、一URAから見て見習いたいと思う方もおられますので。URAのマインドセットを考える際には、URAの機能として自分ができることは何か、他の人もできるかもしれないけれど自分はここが得意であるとか、先生に他のことに時間を使ってもらうために何をすべきかといったことを、より意識する必要があると思います。

また、「総合知」に関しては、やはり場数がものを言うのではないのでしょうか。実際に異なる立場・分野・セクターの方々と直接/間接にやりとりする機会をたくさん得ることで、その方々がある種、鏡のようになってくださって、自分の取り組みがどのようにその人たちに映っていて、どんな影響があって、それがどう跳ね返ってくるのかを実感できます。そうした経験をできるだけ得られるよう心がけることも、ますます大事になってくると感じているところです。

長く同じ仕事をやっていると、どうしても自分の中で固定化されてくるところもあります。それは特定のことで熟達していくとも言えますが、総合的に対応できるように、多様な方の胸を借りて活動していくことを常に忘れずにいられると、URAとして機能を高めていけるのではないのでしょうか。

**新澤** ありがとうございます。

齋藤先生がおっしゃった「専門知」のフロアと「総合知」のフロアを行き来するというのが、ある種、URA の中でもあるのではないかと、コメントを伺いながら感じました。

**新澤** 最後にフロアから1つか2つご質問いただければと思います。

**フロアから** 2つ目のURAのマインドセットは変わるのでしょいか、変わるべきなんではいでしょうかという話について。「総合知」といいか、いろいろな人たちと連携して研究をしなければいけないといいかことは、研究者の方々は、人文科学、自然科学関係なく、皆さんもうお分りのことだと思っんですね。URAも同じ、皆さん分かっていいる話。ただそれがなかなか進まない。

そこで、何が必要なのかといいつも考えるのですが、やはり背中を押してあげる。そここのところに、ボードに踏み込んでいけるっていいるのが、すごく大切なんじゃないのかと思っっています。研究者の人たちに、例えばRISTEXみたいなものがあつたときに、「先生やりましよう」と言っつて、URAの何々さんが言っつただからやるか、と思わせる信頼関係をつくるようなところがすごく大切なのかなと思っつていいますが、他のURAの皆さん、それから齋藤先生、その辺どうお考えでいでしょうか。

**新澤** 齋藤先生、いかがでいでしょうか。

**齋藤** はい。信頼関係、とても大事だと思っつています。そのためにはやはり、場をつくることがとても大事だと思っつていいます。私もヒューマニティーズセンターといいう場ができるまでは、なかなかいいうことを実感する機会、実現する機会がなかつたですが、やはり場ができたことが大きいと思っつていいます。

**新澤** ありがとうございます。稲石さん、お願ひします。

**稲石** はい。昨日のELSIセッションを聞いて、示唆的なご発言がいろいろ

ありました。小林傳司先生（大阪大学名誉教授）のお言葉などまさにそうだなと思ったのですが、例えば、工学系と文系の文化の違いみたいなものがすごくあって。工学系は必ず時間を守るけれど、文系は今日のセッションみたいに時間オーバーしちゃう、意識していてもどうしてもきっちり終われないといった例えもありました。

私も大型研究費などで、理系の先生に、文系のこういう専門の先生を紹介してほしいと言われて、紹介したことがあるのですが、アウトプットが少ないからと言われてしまったことがありました。理系はすごく競争社会で、大型に申請されるような先生はアウトプットもものすごく出しているの、ある程度生産量のある人でないと一緒にやる土俵に上がらないといった感覚があるのかなと思いました。そこら辺は文系のアウトプットの出し方、評価のあり方との差、文化の差があって、一緒にやろうと思ったときに土台が揃わないのかなと思うことが、経験的にありました。

でも、それを乗り越えていかなければいけないときに、これも昨日の ELSI セッションで、普段からもう少しコミュニケーションをとるなり、交流しておかないと、いきなり紹介されてチーム形成できるか、外部資金申請をすぐにできるかという難しいというお話がありました。だから、何かサロンのようなものが気楽にできないか。若手研究者はもう少し幅広く興味を持っていらっしゃって、「総合知」や「文理融合」ということを研究者キャリアを始められた頃から既に言われているので、その辺は柔軟かもしれないし、そういった方々が集まれる場をつくるのがすごく効果的かなと思います。

例えばサロンとか、バーみたいなものを大学につくりましようと言っても、なかなか柔軟にはいかないかもしれない。大学の中に、いかに居心地のいい集まれる場をつくるかみたいなことが、昔から人社系 URA の中でも言われていいましたが、今でも課題かなと思います。

**新澤** ありがとうございます。川人さん、いかがでしょう。

**川人** ありがとうございます。信頼関係、すごく大事だと思いますし、初めて接する先生にも、「それだったらやってみようかな」「ちょっと話を聞いてみようかな」と思ってもらえる、そういう状況を URA としていかにつくれるかも大事だと思います。信頼関係をつくる第一歩として。

毎回そのような状況をうまく生み出せるわけではありませんし、私自身は全学組織にいますので、個々の先生方と関係を続けていくためのコミュニケーションが十分とれているのかも、悩みの種ではあります。

**新澤** ありがとうございます。

## まとめに代えて

**新澤** それでは、このままパネルの皆さんのお話を聞いていたところですが、時間も限られているので、まとめに代えて、私から最後、話をさせていただきます。

このセッションの目的は、「総合知」による社会変革に向けて URA として「総合知」をどう理解し、行動したらよいか、各自が腹落ちする観点を考えようというものでした。私自身がモヤモヤしていたので、このセッションを企画したわけですが、セッションの準備の打ち合わせや今日のお話を伺って、改めてようやく、どうやって考えたらよいか、自分の中に落ちてきた気がしています。

1つ目は内の目で見るということです。今まで「総合知」の定義でモヤモヤしていたのは、それを外から眺めていたからであって、今日聞いたお話はいずれも、「総合知」の推進、その内側に入ったときにどうするがメインだったろうと思います。そうして内に入るのであれば、定義そのものよりも、推進に当たってのさまざまな問いのほうがずっと重要になるわけです。

だからこそ、傍観者から「総合知」を推進する当事者へ、ステークホルダ

ーを巻き込むための、推進を支える仕組みというのが重要であって、ファンディングであったり、齋藤先生のお話にあった評価であったり、さまざまな事項があるかと思います。今後は、「推進するためのファンディングのあり方とは」というような議論がより深まればいいなと思いますし、「総合知」を推進すると言っているのだから、「Top10%論文率を目標に掲げたまままでいいんですか」といった論点も残されていると感じています。

また、学術がゆがめられていないか、「総合知」のフロアだけじゃなくて「専門知」のフロアはどうなっていますかというのは、モニタリングの上で、外の目としても重要であろうと思います。

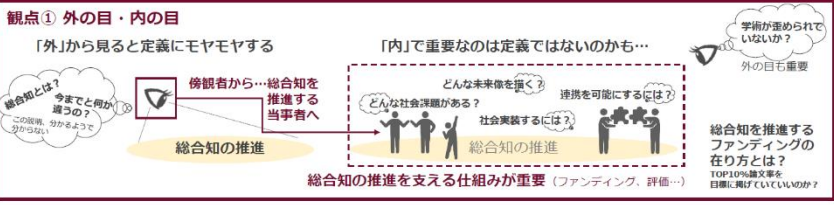
もう1つは、URAの役割に関する考え方ということで、「総合知」推進に当たってさまざま出てくる課題というのは、既にURAが業務の中で扱ってきた課題も多く、だからこそ、「いや、既にやってるし」「何を今さら上から押し付けられているんだ」というモヤモヤもきつとあるかと思いますが、その課題に向き合うフレームワークというのは、業務区分ごとではなかったでしょうか。

例えば、「外部資金獲得支援の担当」として、ファンディングの要件に實際って書いてあるから、そのチームを構成するみたいなロジックです。川人さんのお話にあったように、異分野の研究者をつなげるといった「機能」が重要視されてきているように、今までの、例えばURAスキル標準のような業務区分ごとのフレームワークでは捉えきれないような価値があるだろうと思います。そこをあえて「総合知」的なフレームワークから課題に向き合う。「知」をつなぐ、あるいは受け渡すというようなことが根本にあって、そこに付随して、外部資金獲得支援が発生するというようなイメージですが、そうすると、あるいはURAの役割に関する記載であったり、その可能性であったりというものが広がるのではないかと感じました。

まずは内の目で見るとということと、見方を変えるだけで今までやってきたことも全然価値が違って見えるよというのが、私の腹落ちでした。

**まとめにかえて**

セッションの目標  
**「総合知による社会変革」に向けて、URAとして「総合知」をどう理解し行動したらよいか？各自が“腹落ち”する観点を考えよう**  
 → セッション担当者（新澤）の場合…



最後に、皆さん、ナイス腹落ちでしたかということで、モヤモヤが残っているようであればそれも持ち帰っていただき、また議論の場が継続して持てれば良いと思っています。

また、簡単な宣伝ですが、第8回人文・社会科学系研究推進フォーラムが来年の3月16日、17日に広島大学の主催で、ハイブリッド開催されます。ELSIをテーマにしたものになりますので、ぜひ今後の情報をお待ちいただければと思います。

それでは改めて、登壇者の皆さまありがとうございました。これでF-3のセッションを終わりにさせていただきます。



RA 協議会第 8 回年次大会 F-3 セッション

/第 15 回 JINSHA 情報共有会 報告書

2022 年 12 月 東京大学リサーチ・アドミニストレーター推進室

